

---

# **百の奇人が夜を行く　あるいは現代のオンラインミーティング**

伊達巻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

百の奇人が夜を行く　　あるいは現代のオフラインミーティング

### 【NZコード】

N9173S

### 【作者名】

伊達巻

### 【あらすじ】

妄想癖のある女の子は、今日も今日とて現実逃避な自己完結を続けていた。

このままではいけないってわかってる、けど、あと一歩がなかなか踏み出せない。

お気に入りのブログの管理人アオオーさんに、淡い恋心を抱きながらオフ会へ。

そういえば、泣いた鬼は赤？　青？　それとも、私？

ライトノベル作法研究所、pixivにも同名義で投稿しました。

「お天道様、申し訳ございません」

私の一日は、偉大なる太陽系の中心に向かつて頭を下げることがあります。

特殊な太陽崇拜を信仰してるわけではありません。  
もつとも適當な言葉は、畏怖、でじょうか。あるいは単純に、恐怖、かもしません。

冴えない女子高生は仮の姿、果たしてその実態は美少女吸血鬼……などという誇大妄想的現実逃避をしてるわけではありません。

そう……実はイカロスの生まれ変わりなのです。

嘘です。

むしろ、そういうたムーアイズム（造語：世界の謎と不思議を全  
面的に肯定する主義）に傾倒した方がマシなのかもしれません。  
灰になるわけでも、蝶の翼を溶かされたわけでもなく、ただ単に  
私が太陽様に顔向けできないだけですから。

青く澄み切った空を見ると、やましいことがなくとも顔を背けた  
くなりませんか？ 赤く暮れなずむ空を見ると、もうすぐ夜が来る  
とホッとしませんか？

もしこのような症状でお悩みでしたら、きっと私と似た人間かも  
しれません。

私と似た……。

反省します。出すぎた発言をしてしまいました。架空の話し相手  
に平謝りします。

もし私が政治家だつたら、進退を問われるほどの失言としてマス  
コミに報道されること確実です。

それは「あなた、カフカの『変身』に出てくる毒虫に似ていますね」と同等以上の破壊力をもつた侮蔑の言葉ですか？

本当に、恥の多い生涯を送ってきました。

ともだち…… 小説と漫画とゲームです。アンパン男より友達が多くて嬉しいです。

いじめ…… 何故かありません。透明人間説が浮上しますが、教師には見えるようです。

れんあい…… 私のパソコンではレンアイと入力すると変換と変換されます。嘘です。

もちろん、昼飯はトイレで食べます。言わずもがな…… いいえ、無意識に縦読みにしてしまつといろが私の根暗な所以でしょう。正に便所虫です。

最近の便所虫はパソコンが使えます。

メスにしてはコンピュータの知識もある方ですが、自慢できることがではありません。自慢できる相手もないです。

通学までのわずかな時間も無駄にせず、巡回サイトを確認しなければいけません。強迫観念じみた習慣ですが、他に時間の使いようがないません。自分磨きや恋活などという流行病に罹ったりしない点では健康優良虫です。

スリープ中のパソコンをひとつ起こし、私はいの一一番にあるサイトにアクセス。

『芥川龍之介の桃太郎』

私のお気に入りランキング連続一位記録を天下更新中のサイトです。

シンプルな黒い背景にTOP、PROFILE、MAIN、ON IKKI、BBSと見出しが並んでいます。

管理人はアオオニさんです。

泣いた鬼は赤だったでしょうか？ 青だったでしょうか？

いずれにしても鬼の名を冠するだけあって、メインコンテンツは

鬼や妖怪に関する民俗学的考察です。私は常連なので、もちろん熟読しました。内容はかなりディープで、読み物として大満足です。

サイトのおかげで、今では私もアマチュア京極堂です。いや、彼もそちらの方面は副業だったでしょうか？ ならアマチュアのアマチュア、ミニチュア京極堂です。

メインの更新がなかつたので、ONENKKIをクリック。

鬼の日記で、オニツキ……。

凡人の私には夢想だにしないネーミングハイセンスで、一周回つてむしろダサイと感じてしまいます。アオオニさんは凄いです。リンク先のブログは更新されました。

アオオニさんは決まって夜中に更新するので、朝にチェックするのが吉です。

『20××年月日

突然だけど、鬼ごっこはいいよねー。

国民的遊戯、略して国戯と言つても過言じゃない。

あつ、ドロケイは駄目だ。あんな簡単に泥棒が脱獄できたら、法治国家日本の終焉だよ。教育上良くないので国戯として認定できないよね。

そうそう、鬼ごっここの話だつたね。

あれつて鬼が追いかける側だけどさ、歴史的に見たら鬼つてのは基本的に追われる存在だったんだ。迫害、つて表現でもいいかもねえ？ 意外かい？

ならサイトのタイトルでもある芥川龍之介の桃太郎でも読んでござらん。

確かに異形の力つてのは単体では強いかもしねりいけどさ、結局ね、最後に勝つのは数なんだよこれが。民主主義つてのは最強の暴力にもなり得るんだ。社会的な少数派は滅すべし、なんてくだらない風潮は洋の東西を問わずいつの時代もあるもんだよ。

そういえば、鬼ごっこでも鬼は一人だね。

どう？ 暗示的な遊びに見えてきたりするでしょ？

なーんて、実は思いつくまま書いてるから深い意味はないけどね。まあいいか、話を戻そう。いや、少し「こ遊びから外れるか。

……鬼の話をしよう。

鬼は「おぬ（隠）」が語源だという説は、もちろん知ってるよね。え？ 知らない？ なら今すぐトップに戻つてメインコンテンツから読み直しだ！

というわけで、まあ、語源の真偽はひとまず保留するにしても、鬼は人里離れてひつそり暮らしてた氣の弱い奴らだったんだ。

ある者は謂れなき虐待を受け鬼になり、ある者は自ら孤独を望み鬼になり、ある者は愛する者を殺され鬼になり、またある者はなんとなく理由もなしに鬼になつた。

共通点は、鬼は独りぼっちで生まれるんだ。正確には、独りぼっちだから鬼になるんだ。

独りぼっちってのは怖いもんなんだよ、内にも外にもね。独りぼっちで生きるのはとても心細い、それはわかるでしょ？ だけど、独りぼっちの存在は周囲の大多数の目から見ても、やっぱり怖いんだ。

だつて、わからないんだから。

暗闇を恐れるのが本能なら、鬼を恐れるのもまた本能かもしねないね。わからない、怖い、わからない……典型的な悪循環だ。

そのことを忘れちゃいけないよ。たまに被害妄想な鬼が、忘れちゃうんだよね。

どつかの山を拠点にした悪名高い鬼だつて、ただの偏屈の人嫌いだつたのかもしれない。

現代風に意訳すると、

「どうして俺のこと怖がるんだッ！ いつたい俺が何をしたッ！ 引き籠もつてるだけで誰にも迷惑かけてねえだろゴララア！」 つてな具合で。

悲しいことに、つてアオオ一の僕が言うのもおかしいけどさ、現

代にも鬼がいっぱいいるよ。鬼と人間の狭間で悩んでる半人半鬼も勘定に入れると、それはもう結構な数になるだろうね。

いいかい。

人はね、一人では生きていけないんだ。

一人だと、いずれ鬼になる。心を忘れ、ヒトを忘れ、異形の鬼になる。

人という漢字はお互いが支え合つてるとか、誰かが誰かに寄りかかつてラクしてるとか、いろんな言い方があるけどさ、少なくとも自分以外の存在が必要なんだ。

家族でも友人でも恋人でも、誰でもいい。

よく「我思う、ゆえに我在り」なんて知つたか顔で言うけどさ、僕に言わせれば「我思う、ゆえに我思う」でしかないんだよ。一人つきりじや、人間は「在り」えないんだ。一人だと、ただの鬼だ。

おっと、いけないいけない。鬼ごつこの話から随分とまあ話が逸れちゃったね。僕も珍しく饒舌になつちゃつたよ。いや饒筆かな？こういうのもブログの醍醐味だから、敢えて訂正しないでアップするけどね。

つて、ここでいきなり重大発表！

なんとつ、オフ会することになりました！

詳細は……BBSで！

どこまでも君の友達、アオオニより』

## PROLOGUE - 2

一気に読み終えてしましました。

今更ながら、ブログを読んで気づいたことがあります。

私は、吸血鬼でもイカロスの生まれ変わりでも便所虫でもありませんでした。

……鬼だったようです。

「じぐじく簡単に言つてしまえば、私は独りぼっちなのです。全国ぼっち女子高校生選手権があつたとしたら、少なくとも県代表に選ばれる自信があります。我思うループ（造語：妄想女の自己完結的世界観のこと）に陥つてゐるのです。

それを鬼と呼ぶなら、私はどこに出ても恥ずかしくない鬼でしょう。

アオオニさんのサイトがお気に入りなのは、至極当然のことかもしれません。身近に鬼がない私にとって、唯一の鬼仲間なのですから。

自分の正体が判明したことのほかに、もう一つ重大なことがあります。

最後から三行目のある三文字に強く目が引きつけられたのです。オフ会……つまりオフラインで会うということです。当たり前です。少し混乱しています。なぜ混乱してゐるのかわからず、混乱に拍車がかかります。くらくらします。急性貧血症かもしません。チユパカブラにやられた可能性も否定できません。ミステロン説も有力です。

なにより情報が必要です。

バックスペースキーを叩きトップに戻りBBSをクリック。しようと思つてPROFILEをクリックしてしまいました。混乱して思い通りのコマンドが選べません。

アオオニさんの簡単なプロフィールが載っています。

年齢、永遠の十七歳とあります。

私と同じです。

といつても成長中の十七歳ですので、半年後に追い越しますけど。法律上いろいろと損な年齢です。アオオ二さんの実年齢は十七歳以上と予想しますが、むしろ少し年上くらいが好ましいです。

どういった意味で好ましいか、あえて不問とします。

好きな本、映画、音楽。

私と同じです。

アンチ王道な作品ばかりで、密林の感想さえ見当たらないマイナブリード。

このサイトで知つて、どうにかネットオークションで取り寄せました。そして偶然、同じものが好きになつたのです。アオオ二さんが好きな作品だから、という先入観があつたのではなく、偶然なのです。問題ありません。

たとえ問題があつても、鶏が好きか卵が好きかの些細な問題です。私は卵が好きです。いろいろと微妙に違つ氣がしますが、混乱してるので仕方ないです。

どうしてこんなに混乱してるか朧気ながらわかつてます。  
けど、わからないフリです。

顔が赤くなつてる気がしますが無視します。さすが鬼です。鬼のなかでも、赤鬼です。独りぼっちの、赤鬼です。なぜだか、涙が出そうになります。

思い出しました……。

泣いたのは赤鬼です。

時刻を確認すると、家を出るまで時間がありません。他の巡回サイトは夕方以降に回すとして、何よりもオフ会の詳細を確認しなければなりません。

今度こそ、BBSをクリック。

投稿者アオオ二の新着記事を見つけました。

『件名：オフ会告知！

来る20××年月 日にオフ会することになりましたー！  
ブログにも書いた通り、現代にも鬼は結構いると思うんだ。むしろ考え方によつちや増えてるかもね。それも一つのライフスタイルかもしれないけど。

苦しんでる鬼もいるんじやないかな？隠れて泣いてる鬼もいるんじやないかな？

僕はね、今も昔も泣く鬼には甘いんだ。

やり方を間違えたときもあつたけど、それもまあ、いい思い出かな。

現代っ子のアオオ一は、インターネットで同志を集めてオフ会を開くことにしたんだ。

題して『百奇夜行』オフ会！

参加資格は、自分が鬼、あるいは半人半鬼くらいかも、つていう自覚があればオーケー。

活動内容は、名前の通り夜の散歩ってところ。

あえて百奇夜行じゃなくて百奇夜行にしたのは、現代の感覚に合わせたかったからだよ。法治國家日本で、鬼が夜中徘徊してたら警察沙汰だろ？だから、ネットのオフ会で奇人変人が集まつて夜の散歩をするつてスタンスなんだ。これなら、職質も怖くない！

……よね！…………ね？

書いてるうちにちょっと自信が揺らいできたけど、なんとかなるわ。

集合時間は、ちょっと早いけど零時ちょうどにしよう。あれ？すると日付がずれるのかな？ こういうのって伝えにくいよね。うーん、じゃあ20××年月 日二十三時五十九分にしよう。これなら間違いない。

集合場所は鬼々骨駅ききばねだ。

やっぱ名前の印象は大事だからね。オフ会のネーミングだつて、奇人と鬼人をかけるわけだよ。言靈つていうのは、もちろん知つ

てるよね。え？ 知らない？ なら今すぐトップに戻つてメインコンテンツから読み直しだ！

というわけで、鬼仲間に会えることを楽しみにしてるよ。

どこまでも君の友達、アオオニヨリ』

幸い、鬼々骨は地元からそう離れていませんが……。

私は必死に夜外出するための口実を考えながら、今日のところは日課である巡回サイトのチェックを諦めることにしました。オフ会は、今夜だからです。

「ふうー」

腕時計の針に息を吹きかけても、当然のことながら時計の針は速くなりませんでした。

どうも、授業に身が入りません。

学校は嫌いですが、退屈で平凡な授業は嫌いではありません。テスト前になつてもノートを借りる友人がいないから、という消極的な理由で積極的に授業を受ける必要があることも否めません。今日の授業範囲がテストで出ないことを祈るのみです。

チョークが黒板を打つ音と、時計が秒針を打つ音と、雑談中の同級生が相槌を打つ音を聞きながら、私は自分だけの世界に没頭しています。

すると、教室の中に個室が生まれます。

自我を強化し世界と隔絶した絶対空間……と中一病っぽく表現もできます。リアル A.T フィールドです。逃げていいのです、この個室に。

どうしてでしょう、いつもより愉快です。

この孤独が、私が鬼だということの証明だからでしょうか。そう、私は鬼なのです。フヒヒ、と笑いたい気分です。

どうしてこんなに浮かれてるのか、冷静な自分が答えを出しました。

簡単です。

鬼であること、孤独であること、とても威張れないことを誇りに思う理由なんて。

ただ、アオオ二さんとの共通点が増えるのが嬉しいだけなのです。と、喜んでるばかりじゃいけません。

オフ会まで時間がないのですから。

そもそも告知したその日に決行なんて、非常識です。

常識的なオフ会がどれくらいまえから告知するのか、私は未経験者なので比較できません。それでも当日はありえません、たぶん。私は……もちろん行きます。

幸い、親の了承は朝のうちに得ることができました。口から出任せですが、友達の家に泊まりに行くことになつたと告げたのです。もし本当だつたら前代未聞です。空前絶後です。夢にも思わないことはこのことです。

友達がいなぎのに、どうして友達の家にお泊まりができるでしょう。流石に親に疑われるかと思いましたが、杞憂でした。急な話でしたし、どもりながら伝えたのに、なお私の話を信じたのです。父親も母親も、特に突っ込んだ質問はしませんでした。オレオレ詐欺には気をつけよう、あとで言ひつゝもりです。

さらり、

「おまえにも、とうとう仲のいい友達ができるんだな」

と失礼極まりないことを言いながら……涙を流したのです。

たかが友達の家にお泊まりだと伝えただけで、朝っぱらから泣いたのです。

嘘なのに……。

とても、悪いことをした気分になりました。

小学校のとき食べきれなかつた給食のパンをポケットに隠したことを忘れ、そのまま洗濯機に入ってしまったとき以来の罪悪感です。私が思つていた以上に、普段の生活態度から親には心配をかけていたのでしよう。無知ゆえに罪悪感がなかつただけで、悠々と自分の世界で誰にも迷惑をかけず生きてるつもりで、両親には見えない傷を日々刻んでいたことに思い至りました。

友達の家に泊まるときの、嬉しそうなホッとしたような親の顔を思い出します。

さつきまで浮かれていたのに、急に気分が沈んでしまいました。本当に、人でなしです。

鬼ですから、人でなしなのは当たり前じゃないですか。

陽気な自分がオーッ「ジョーク（造語：鬼しか笑えない冗談）」を思いついたので、この話は終わりにします。

今夜は、オフ会なのですから。

普段からやや夜型の生活をしてる私ですが、深夜以降の活動は前提としてません。

体力がある方だけは「冗談でも言えませんから、温存する必要があります。

最も効果的に英気を養うことができ、さらに鬼である罪深さに自己嫌悪することもない手段が一つあります。

初めてです。大冒険です。ちょっとびり不良です。

私は、授業中に居眠りすることにしました。

チャイムの音が目覚まし代わりという人生初の経験をしてしまいました。

ワルです。超ワルです。これぞ鬼という感じでしょうか。

授業中の居眠りは普段よりスッキリできると漫画かアニメの登場人物が言つていましたが、私には当てはまりませんでした。机に伏すような形で寝て、むしろ肩がこつてしまつたような気すらあります。

これは仮説ですが、授業中の居眠りでスッキリできるのは授業が嫌いな人種に限られるようです。基本的に私は授業が嫌いではないので、ささやかな罪悪感と肩のこりしか得られませんでした。

まだ午前の授業が一時間も残っています。

中途半端に寝たせいで頭が痛いです。これならあと一時間くらい寝られそうですが、かえつて症状が悪化するかもしれません。今夜は大事なオフ会があるので、病欠なんかしてしまつたら本末転倒もいいところです。

寝るべきか寝ざるべきか、それが問題です。

あーうー、と私が萌えキャラだつたら唸るところですが痛いのでしません。思いつくだけなら痛くない、はずです。少なくとも痛い未遂なので執行猶予ぐらいはつくでしょう。

今は休み時間なので、休むことにしましょう。

言靈は大事です、ヒアオオニさんも言つてましたし。

たしか、次の時間は数学です。

数学は得意です。というより、勉強自体が得意です。与えられた問題に一つの答えを当てはめていくだけで誉められるので気が楽です。

移り変わる流行に敏感になつたり、相手を思つて気配りしたり、そういうふた対人スキルの方がよっぽど難しいです。

遠い未来にSF的なアンドロイドができたら、私のような人間だつたらほぼ遜色なく再現可能な気がします。それくらい、私は簡単なのです。勉強ができるくらいじゃ、人間だとは言えません。

はて、私はどうしてこんなことを考えてるのでしょ？  
考えるべき問題は、哲学的ゾンビな話ではありません。寝るべきか寝ざるべきか、です。ついつい考えすぎてしまうのが悪い癖ですか寝ざるべきか、です。ついつい考えすぎてしまうのが悪い癖です。  
問題を戻します。

最初の十分だけ様子を見て新しい範囲に入りそなうなら継続して授業を受け、練習問題なら居眠りてしまいましょう。一応進学校なのですが、進学校ゆえに居眠りをしても黙認される傾向があることはわかつています。

私は机の上の腕枕に額をつけ、自閉的な暗闇の中に顔を埋めました。

しばしの安息。

「ねえ、赤井さん」

外界から呼びかけられてる気がしますが、幻聴でしょ？

「大丈夫？ ゆさゆせ」

外界から揺さぶられてる気がしますが、幻触でしょ？

というより、「ゆさゆせ」と律儀に声に出すところが幻覚の幻覚たる所以です。

「何か喋つてよー」

「あーうー」

幻覚と会話する萌えキャラがいます。私です。

とても嫌な属性ですが、遠い未来に流行るかもしれません。

「赤井さん！ 驄目、身体が冷たい……ここで寝たら死んじやうよ！」

「いいは雪山ですか？」

……。

……。

.....。

三行ほど二点リーダで思考停止してしまいました。

顔を上げた先には、クラス委員長の緑川さんが驚いた顔をしています。私もきっと、いいえそれ以上に呆けた顔をしてることでしょう。

「脳内一人ツツコミをしたことはあっても、他人にツツコミをしたのはこれが初めてです。魔が差しました。

これも鬼の宿命なのでしょうか。

ともあれ緑川さんの気分を害してしまったかと心配でしたが、なぜか笑顔です。

「ううん、ここは雪山じゃなくて学校だよ。だから、本当は寝ても死なないんだよ。『めんね、変な冗談言つて。面白くなかったよね、ちょっとしか

「…………ほつとしました」

「ちょっと面白くなかったと伝えるほど、私は鬼ではありません。気分を害してなかつたことについては内心ほつとしましたので、伝えておきます。

緑川さんは勉強もできクラスの委員長もやつてるような絵に描いたような優等生でしたので、まさかこんな天然なキャラクターをしてるとは思いませんでした。それとも、心の中で緑川さんにグリリバとあだ名をつけた報いでしょうか。

今も何かがツボに入ったかのように、くすくす笑い始めました。

「あはは、赤井さん上手だね。『ほつとした』と「ホツト」をかけてるわけだね。私が雪山ネタを振つたから、瞬時に切り返してくれたんでしょ。凄いなあ。こういうの、確か……尿意即尿つて言つんだっけ?」

「それだとただの尿漏れですっ! この場合は当意即妙だと思います!」

「人生で一度田のツツコミです。」

「そのツツコミ、こいね」

と緑川さんが言ったので、今日とこいつはシッコ!!記念日になりました。

思い出せないほど久方ぶりにクラスメイトと会話めいたやり取りをしてるというのに、随分とアクロバティックな展開です。それとも、私が知らなかつただけで、昨今の若者同士の会話とはこいつものなのでしょうか。

……対人恐怖症に拍車がかかりそうです。

「うん。思つたより元気そうで安心したよ」

「むしろ無理矢理に元気を引きずり出された感じです」

「え？ 無理矢理って？ やっぱり、具合悪いの？」

「はあ、ええ……いや、まあ」

曖昧に答えながら、私はやつと緑川さんが話しかけてきた意図を察したのです。

心配されてるのです。

他人に心配されるという状況に慣れていないために、随分と気づくのに時間がかかりました。これじゃあ、緑川さんを天然と呼ぶのは憚られます。

今までこうやって声をかけられたことがなかつたので、おそらく授業中に居眠りをしたことがきつかけなのでしょう。

私みたいな地味で目立たない独りぼっちの一生徒の些細な変化も見逃さないとは、イギリスの監視カメラより正確に教室内をモニタ－しています。プチ不良生徒である私の居眠りも、即座に察知されたのでしょうか。

それを見てなお、クラスの委員長である緑川さんは居眠りを咎めるわけでもなく、私の体調を心配してくれたということです。

聖人に違ひありません。

「うーん、曖昧な返事だな。赤井さん、やっぱり具合悪いんじやない？ 今日は無理しないで早退しどく？ 安心して、私が先生に言っておいてあげるから。理由は……えーと、電車が遅れたからでいい？」

「それは早退じゃなくて遅刻のいいわけです！」

「そつか。ごめんね、気が利かなくて。遅延証明書が必要だからばれちゃうか」

うんうんと悩み出す緑川さん。

天然に違ひありません。

天然星から来た天然星人、もとい、天然聖人です。世間的な言い方をすれば、ただの天然ないい人、なのでしょうけど。私みたいな鬼に話しかけるとは相当なものです。

「じゃあ、親戚が死んだ……っていうのは不謹慎だから、自分が死んだからお葬式で帰りますとか？」

「私は動く死体ですか！」

「はは、まさかー。赤井さんはちゃんと生きてるよ

「言つてることが支離滅裂です！」

「……生きてる、死体？」

「真顔で酷いこと言わないで下さい！」

そんな面白いのかつまらないのかわからない、言つてしまえばくだらないやり取りを緑川さんとするうちに、休み時間の九割が終わってしまいました。

ひとしきり話して満足したのか、緑川さんは爽やかな顔をしています。

私は？

私は、いつたいどんな顔をしているでしょつか？

もしかしたら……もしかしたらですけど、料理レシピの塩こじょう少々といった塩梅程度には、笑つているかもしれません。

鏡で今の自分の顔を見たいような、見たくないような、そんな複雑な心持ちです。

緑川さんは、ちょっと大人びた微笑を浮かべながら、満足そうに頷いています。

「うん……やっぱり、赤井さんは思つてたとおり楽しい人だね」「……私の緑川さん像は百三十五度くらい変わつてしましました」「ははは、じゃあ私の赤井さん像は三百六十度変わつたかな」「なんにも変わつてないじゃないですか！」

「ううん、変わつたよ」

緑川さんの優しいですけど有無を言わせぬ物言いに、私は驚きました。

なにか……私の心の隙間に一歩踏み込んでくるような、そんな予感がします。虫の知らせがします。警報が鳴り響きます。

わかつてるのです、この一線を死守するために人と関わらなかつたのに……。

今私は、無防備すぎました。

鬼であることをしばし忘れ、世界と接触しそぎました。

セルフフィールドは安居酒屋の暖簾のように日々と払われ、緑川さんはぐっと顔を近づけてきます。鼻と鼻がぶつかりそうです。よく見ると女の私から見ても女性的で端整な顔立ちをしています。

決定的な言葉は、甘い吐息とともに吐き出されました。

「だって赤井さん、いつも一人だから何考えてるのかわからなかつたから。独りぼっちで、殻に閉じこもつて、何も見えなかつたから

「あ……ああ……」

「なんとなくこんな人だろうな、と頭では思つていても、実際話したことなかつたでしょ？ だから、三百六十度変わつた、つて表現は当意即妙だと思うよ」

「緑川さん……」

「ん？ 間違つてるかな？ 独りぼっちじゃなかつた？ 私の知ら

ないところで友達いたりする？ いないでしょ。教室の人間関係は大体把握してるけど、そこに赤井さんはいないよね」

動搖、恥辱、後悔、いろいろな感情がざっと押し寄せます。

初めて、他人から言われた気がします。

独りぼっち。

お前は独りぼっちだ、と言われるのと、私は独りぼっちです、と独りごちるのとは絶望的に違います。

とても自分が恥ずかしい存在だと罵られてるような気がしました。とても自分がみすぼらしい存在に成り下がつてしまつた気がしました。

ですが、事実です。

田を背けていても事実は事実として、他人の目にそう見えていたのは否めないです。

友達の家に泊まりに行くと言ったときの、両親の泣き笑いがフランク・シュバックします。

痛いです。

心というものがあるならそれを今すぐこの手で掴んで「ゴミ箱に捨てたいくらいに、痛いです。痛みを感じるのが脳なら、脳を摘出して下さい。お願ひします。法外な料金も何とかしますから、ブラック・ジャックによろしくです。いいえ、この場合はドクター・キリコでしょうか。

「赤井さん、やつぱり具合悪いんじゃない？」

ここでそれを聞くのは、酷いです。極悪です。天然聖人は仮の姿でした。

私がなにも答えられないのを察したのか、緑川さんは耳元でまくし立ててきます。

「私ね弟がいるの。年が離れてやんちゃ盛りなんだけど、可愛くて。まだ小学生だからか、鬼ごっこが好きでさ、よく膝小僧を擦り剥いてくるんだ。怪我したら、かさぶたができるでしょ？ 私ね、かさぶたを剥がすのが好きなの。それも綺麗に取るんじゃなくて、わざ

と不器用にやつて痛みが残るよつに。

……それが、私の「ミニミニケーション」なの。スキを見つけて、キズを見つけて。だからかな、クラスの委員長をやつてるのも。田中さん提出物は？ とか、斎藤くん宿題やつた？ とか、そういう忠告はいいよね。話のきつかけが作りやすいから。つうん、私はそういう風にしか、人と接することができないのかも。

もうわかると思うけど、天然で抜けてるキャラも作ってるんだよ。その方が同性異性問わず、油断してくれるからね。自分が上なんだ、つて相手に思わせておくのがスキを作るポイントだつて、小学校に入学するまえには学習してたんだ。

だけどね、赤井さんだけは隙がなかつた。

孤立してる子は、孤立することが隙になり得るんだけど、赤井さんは違つた。

完全に他者を拒絶して、壁を作つてた……。成績が優秀だつたらかな。見た目が綺麗だつたからかな。完全無欠、つて言葉が似合うくらい他者を必要としてなかつた。

そんな赤井さんが、今日は居眠りしてたでしょ？ だから、攻めてみたの。ちょっとだけ……怖かつたけど。けど、やつぱり思つてたとおり楽しい人だつた。

ねえ……私たち、いい友達になれそうだと思わない？

言つてることの半分以上がわかりませんでした。

特にわからないのは、冒頭からの展開と最後の一文の関係です。どこら辺にいい友達になれる根拠があるのでしょうか。是非とも国語のテストのように傍線を引いて教えてもらいたいです。

いい友達になれそう、という発言に素直な自分が嬉しがつてゐるも確かです。

ですが、相手が緑川さんだという点に躊躇います。

この人は、思つていたよりさらに複雑怪奇なお人柄なようです。あと、ドレです。

「緑川さんは、いつたいなんなんですか？」

「いついた質問をついしてしまった私は、ドMなのでしょうか。また強烈にまくし立てられるのでしょうか。怖いような、楽しみなような……って危ない思考になっています。

ちなみに、まだ鼻と鼻のくっつきそうなほど接近してゐる状態です。周囲から見たら薔薇が映つてゐるのでしょうか。嫌です。B君は嫌いじやないですが、そっちのケはありません。

幸運なことに、このタイミングで休み時間を終えるチャイムが鳴りました。

すつ、と緑川さんは身体を離して、にこりと笑います。

まるで無邪気な少女のような笑みで、一言。

「私つて、天然なの」

「そうですか」

緑川さんは天然じやないようです。

結局。　その後の授業は居眠りすることができませんでした。緑川さんの視線が気になつて仕方なかつたからです。犯罪抑止に一国一台は緑川さんを置いておくといいかもしれません。昼食。

高校に入つて初めてクラスメイトと一緒に食べました。相手は緑川さんです。強引に私の腕を引っ張つて半ば拉致した強引さも驚きましたが、うちの学校に中庭があり昼食時は憩いの場になつていることの方が驚きです。

そもそも中庭の存在を知らなかつた私は、トイレと比ぶべくもない開放感に食欲がなくなつたくらいです。お天道様が眩しかつたです。

「食欲ないの？」

と緑川さんに聞かれた私は、

「太陽のせいです」

と答えてしました。

他人からしたら意味不明なハツ当たりかもしませんが、これが

私の本心です。殺人の動機を聞かれて太陽のせいと答えた小説がありました。主人公のムルソーは、少しばかし正直者すぎたと思います。

食欲がない理由を聞かれて、あるいは人を殺した理由を聞かれて、太陽のせいと答えるのは模範解答からずれています。ですが、仕方ありません。私もムルソーも、たぶん嘘が苦手な鬼なのです。

緑川さんは「そうだね、太陽のせいだね」と答えて、お互い黙つてちびちびとお弁当を食べました。どうやら、緑川さんも食欲がなかつたようです。そして、私やムルソーと同じように正直者でした。

## ACT 2 - 1

隙を見せなければ、緑川さんは大人しい人だということがわかりました。もちろん、私なんかと比べたらお喋りですし、実際話しかけてくれるのは緑川さんからのですが、会話 자체はあまり長く続かせん。

だからこそ、積極的に相手の隙をつこうとします。

かさぶたを見つけ剥がすのが、緑川さんの戦法なのでしょう。格闘ゲームだったらラッシュは強いけど防戦になると脆くなる典型的な攻めキャラのイメージです。残念ながら私はカウンター重視の戦法なので、緑川さんを防戦一方にするという展開にはなりませんが。

昼休み中ひょんな会話の折で私があまり私服をもつてない話をしたので、さっそく新しい服を緑川さんが探してくれるという流れになりました。とんとん拍子に話が進みます。ずっと緑川さんのターンという感じです。

放課後。

気がつけば、私は緑川さんと一緒に駅ビルで洋服を物色していました。

「赤井さんはスタイルがいいから、何を着ても似合いますよ。これなんかどうかな? きっと、道行く男子の目をぬか漬けにするよ」

「私は漬け物じゃないです! それに露出狂でもありません!」胸元がえらく開いたヒラヒラの下着のような、キャミソールと呼ばれる布を私の身体に押しつけるようにして、緑川さんはとても楽しそうに笑っています。

「これくらい今は普通だよ。恥ずかしかったら、上に男物のトレーニングコートを羽織れば」

「余計に変態です!」

「じゃあ、このカーディガンなら可愛いよ」

「……前々から思っていたんですが、キャミソールというのは下着なんですか？ それとも、Tシャツみたいな上着なんですか？ 境界線があやふやです。下着風の上着なのか、上着風の下着なのか、それが問題です」

「そう言われば、そうね……」

緑川さんも悩んでいます。やはり根が素直なようです。天然ではなく養殖のボケキャラですが、悪い人ではありません。

会話は昼休みのときより弾みます。それはもうスーパーボールのようにポンポンと弾みます。まるで自分も一緒に喋りになつたようになりますが、きっと違うでしょう。

緑川さんがボケて、私がツツコむ。

一般的な歓談というより、むしろ漫談のように明確な役割付けがされています。

お互にとつてそれがラクなので、私もやぶさかではありません。「うーん、素材はいいのに赤井さんはちょっと欲がないよね」「欲ですか？」

「そう、欲。よく見られたいって欲がないと、お洒落なんてできなあからね」

「だったら緑川さんは誰かによく見られたいんですか？」

「特定の人ってのはいないけど、私はみんなによく見られたいかな」「あー」

納得です。

今はお互に制服なのでわかりませんが、きっと緑川さんの私服はさぞ清楚で可愛らしいものでしょう。居眠りを指摘されてからのわずかな交流と、私の低い人間觀察力をもつてしてもわかるというものです。

一言で表せば、良くも悪くも緑川さんは計算高い人という感想です。

裏を返せば、そこまで私に自分をさらけ出してくれてる、という

ことかもしれません。

「で、赤井さんはよく見られたい人とかいないの？　たとえば、好きな男の子とか」

「好きな……」

アオオニさんの顔が思い浮かびます。

とはいって、実際見たことなどないのでほんやりとしたイメージですが。

ちなみにイメージ上は、すらりと背が高い痩せ形のシルエットで、二ヒルな笑いを口元に浮かべた好青年です。年齢は私より少し高いくらいから二十代後半までと比較的範囲を広くとっています。

要は、ただの理想です。妄想です。けど……。

ちょっとと考えれば年齢も性別すらもわからないというのに、なんとなくどうしようもなく、重力のように自然な成り行きでアオオニさんに惹かれています。

「あれ？　赤井さん、顔」

「へ？」

気がつかぬうちに、私は赤鬼になっていました。

「うわあ、耳まで真っ赤だよ。もしかしてもしかして、好きな人の？　本当？　ええーっ、誰々教えてよ？」

「あーーうー」

「……萌え？」

慣れない展開に赤鬼になつた萌えキャラがいます。私です。

これだと狙いすぎの萌えになつてしまします。そんなの嫌いです。最初に話しかけられたときは寝言で済みましたが、今はしつかり覚醒中です。

自分が嫌つてる存在に自分自身がなるのは耐えられません。「お兄ちゃんダイスキ」とろくでもない主人公に好意を寄せる妹キャラは絶滅してほしいです。

このまま「あーーうー」キャラが緑川さんに定着してしまつたら、そういうふた萌えキャラの末席に名を連ねることもあります。

それだけは、全力で阻止しなければなりません。

「フヒヒ、フヒヒヒヒ、アー、ウー、ヒヒ」

と薄笑いで自嘲しながら萌えを自重します。怪しげな抜群で萌えも

吹っ飛びます。

さり気なく「あーうー」を入れることで、さつきの奇声も相殺することを忘れません。

「え、なにその笑い方……。キモー！」

「……良かつたです」

これでいつもの私です。

キモいと言われてホツとする否萌えキャラの卑屈キャラです。これで萌えと呼ばれるなら、私の予想より時代が速すぎるので諦めます。

あとは、このまま話が逸れてくれることを祈る限りです。

「冗談はさておき、赤井さん誰が好きなの？」

世の中は私が思つてゐるより甘くありませんでした。

萌えキャラが定着するという危機は脱したものの、また一難です。いや、むしろ最初からこっちの難しかなかつたのかもしれません。

緑川さんの一時間に及ぶ質問攻めに場慣れしていない私が対処できるはずもなく。

「……いないこともないです。むしろ……今夜会うといふ可能性も低くはありません」

なんとも曖昧でわかりにくいですが、顔を真っ赤にしてるというオプションがついてるせいもあって、私は好きな人がいることを肯定してしまいました。

さらに、詳細こそ話しませんでしたが、今夜会うことも仄めかしました。

「じゃあさ、勝負服！？」

この場合の勝負とはどういった意味合いなのか計り兼ねますが、そのぐらいの気合には必要なかもしません。

「……初勝負です」

私は赤い顔を隠すよう俯きながら、神妙に告げました。

「おおーっ！ 初勝負！」

「おひらの物言いに過剰に反応してる」ことが氣になります。縁川さんの頬も心なし朱に染まってるような……。

どうやら多大な勘違いをさせているようですが、訂正する氣力はありません。

レット・イット・ビーです。オールライトです。

「なら一人でお洒落な服選んで、今夜は盛大に清潔を散らかそう！」

「それを言うなら純潔を散らすです！ てか散らしません！」

その後は引きずられるまま為すがまま、お店をはしゃいでこきました。

あれよあれよと振り回されて、縁川さんに完全コーディネイトされていきます。

さらに一時間後。

完成しました。

新しい私が。新しき私が。

「……完璧ね、赤井さん。これなら私が惚れそうよ。惚れそうよ」「二回も言わないで下さい」

「大事なことなのよ」

緑川さん、目がちょっとマジです。

これはもしかすると、新時代の純潔の危機を迎えるかもしません。

「いや、いやいやいや。緑川さんに惚れられても困ります」

「駄目だよー。ボケるのは私で、赤井さんはツツ「ノミ」でしょ」

「惚れられて困ると言つのはボケなんですか！？」

「うん」

「即答なんですね！ 私はボケとツツ「ノミ」の一ノ刀流ですか！」

「そうか、二刀流なんだ……。けど、私は大丈夫。個人的には男の人との浮気は我慢するけど、女の子との浮気は許せないかな」「絶対に違う想像してますよね！」

もしや緑川さんは本当にそつちの人なのでしょうか。

さり気なく半歩だけ緑川さんと距離を離します。

そして、緑川さんは吸い付くように一步前進します。

半歩分の接近を許してしまいあわあわと私が狼狽してることなど露知らず、緑川さんは私の服を満足気に眺めています。

「でも、そのスカジャン格好いいよ、うん。やっぱり赤井さんは背が高いから、こういつた服も似合つねー、いいなー。これぞ勝負服つて感じ。もう誰にも負けない、って背中の龍が吠えてるね」

「……緑川さんを侮つていました」

徹頭徹尾、ボケ倒しでした。

抵抗しない私も私ですが、緑川さんは養殖のボケキャラの中でも、悪意のあるボケキャラということを失念していました。百合ネタもボケでしょうし、服のチョイスもまたボケなのです。小さな隙を作

るための緑川さんの戦法なのです。

私の格好を一言で表せば、前衛的、でしうつか。。

上は真っ赤なスカジャン、背中に龍の刺繡付き。下はなぜか黒いゴスゴスのフリフリミニスカート。靴はウエスタン調のレザーブーツ。

統一感皆無の異文化交流ファッショングです。

それでも、髪がショートで平均より高めの身長が相まって見れないこともないかもしません。ファッショングセンスなど持ち合わせていませんが、自分で選ぶよりセンスがいいでしょう……たぶん。これはこれで……。

「あはは。充分笑わせてもらつたから、ちゃんとした服買おうよ」「とんだ笑いものです」

「大丈夫。今度は可愛くコーディネイトするから」

「……いえ、これで結構です」

「へ？ 嘘でしょ？」

「本気です。一人だとこの組み合わせで買おうなんて思いません。二人で巫山戯ながら服を選んだからこそその数奇な組み合わせです。私はクラスメイトと洋服探しするという経験が初めてなので、いい記念になります」

なるべく心の丈をわかりやすくよう語りついたら、わかりにくくなつてしましました。

それに、ちよつとクサイ」とを言つてゐる氣もします。恥ずかしいですが、もう気にしません。今の格好もそこそこに恥ずかしいので、免疫がついたのでしょう。

呆気にとられたようにしばし停止した緑川さんは、ちよつと躊躇いながら一言。

「……私も、いつやつて買い物したの初めて」

「そうですか」

なんとなく、わかつてました。第一、はしゃぎます。

私と緑川さんの間に、沈黙が訪れました。

さつきまで姦しかつた分、余計に静寂が際立ちます。

「ここは、私が何か言つべきだと妙な使命感に駆られ、自分らしくないことを口走ります。

「次は……次の機会があれば、私が緑川さんの服を選びます。それで、おあいこです」

「一步、踏み込みます。

けど、おあいこ、といつ卑屈な表現が自分らしいです。

「そうだね」

緑川さんは、嬉しそうな恥ずかしそうな、そして同時にどうしたらいいか途方に暮れたような、そんな気まずさをない交ぜにした曖昧な笑顔で頷きました。

お互い距離感がイマイチです。

「ミユニケー・ションがチグハグです。

私は攻めるのに慣れてないですし、緑川さんは防戦に回ると途端に大人しくなります。

「……………そうだね」

緑川さんは、一度、頷きました。

大事なことだから、というわけではないでしょう。その一度の頷きは次の機会を了承したのではなく、保留したのだと直感しました。

まだ、お互いの世界は触れ合っていません。

まだ、私は鬼のままです。

オフ会までの時間を外で潰そつかとも思いましたが、思わず出費で軍資金に不安が残ります。夕食は家で食べることにしました。

「ただいま

「おかげ……り

はて、どうしたのでしょうか?

ちょうど玄関で鉢合わせた母親が、ツチノコを見つけたような顔をしています。

「ど、どうしたの、その格好……」

「格好……あ」

U.M.Aは、私でした。

買った服をそのまま着込んでいたのです。

赤いスカジャン。フリフリミニスカート。やんちゃなブーツ。それに、スクールバッグ。

本来制服のはずの帰宅時の格好が、見当違いの不良の格好になつています。

それに、今日は友達の家にお泊まりに行くと言いました。

悪い男に惚れる 格好も彼の好みに 純潔を散らす 清潔を散らかす

最後は緑川さん流の悪ノリですが、大体こんな感じのことを思われてる恐れがあります。

きっと母親の頭の中で私は陵辱されてるはずです。いや、されたくないかもしれませんが、良からぬ想像をさせるに値する格好とタイミングなのは違ひありません。

言い訳をしなければ。

早急にそれっぽい言い訳を捏造します。

「バ、バンドをするんです」

「バンド!？」

「そ、そうです。ロックンロールです」

エアーギターもどきの動きで母親を威嚇します。飛び跳ねます。マイクで歌うフリをします。気分は魅惑の深海パーティーでジョニー・B・グッドをテケテケと弾くマー・ティです。

「へ、へえ……そうよね。私の頃とは時代が違うのよね、ええ、わかつてゐるわ。ええ、ええ。バンドね、いいわよね、ええ」

呪文のように「ええ」と納得しながら、母親は夕食の買い出しに向かいました。

この嘘はあとで絶対に訂正しなければ、と心に強く誓いました。

ちなみに、夕食はなぜか赤飯でした。

適当に駅前のネット喫茶で時間を潰したあと、鬼々骨駅に向かいました。

なんやかんやで巡回予定のサイトはチェックできてしましました。ライフスタイルは変えにくいといふことじょう。嬉しいのに、どこか残念です。

私は……変わりたいのでしょうか？

今日、緑川さんとたくさんお話をしました。馴れ合ひといふより探し合いでしたが、大きな進歩です。クラスの同級生と放課後ショッピング。まさかそんなコテコテの若者らしいイベントを経験するとは驚きです。

こんな時間に外に出るのも、考えてみれば初めてです。目的はアオオニさんのオフ会。誰かに積極的に会いたい、そう強く思ったのも考えてみれば初めてです。我思フループからはみ出して、世界に興味が出てきた証でしょうか？

ぐだぐだ考えながら歩いてたら、駅に着きました。

「……おかしいです」

誰もいません。

世界に興味が出てきたかしらん、と思惑を巡らせてゐるだけに限つて、世界に見放されたように独りぼっちです。

都会とはお世辞にも言えませんが、鬼々骨駅は急行も止まるそこそこ大きな駅です。時刻はオフ会の約十分前、二十三時四十九分。四十九、というのが若干不吉な並びですが、終電にはまだ余裕があるはずです。

灯りはあります。コンビニもデーナンツ屋さんも煌々と輝いています。

それなのに、誰もいません。

オフ会の参加者らしき人が見当たらない、などといふ甘いもので

はありません。

言葉通り文字通り、誰もいません。

人つ子一人見当たらないなんて、初めてです。

「あのー、誰かいませんかー」

まさかこんな台詞を吐くことになるなんて。でも案外、差し迫った事態に陥ると人間の行動パターンは単純化するかもしません。冷静に自己分析しての合間もきょろきょろと見渡しますが、独りぼっちです。

「すみません、誰かいませんかー」

ネット喫茶から出てぼんやり歩いてる間に、人類は私だけを器用に残して絶滅してしまってのしようか。マヤのロングカウントカレンダーには少し早いですが、誤差の範囲なのかもしれません。あるいは、私だけが例えば交通事故で気づかぬうちに死んでしまったのでしょうか。浮遊霊なり地縛霊なりになってしまって、表裏一体の異世界に足を踏み入れ……。

そこで、運命的な出逢いを果たすのであった。

次回『白馬の青鬼サマ』乞うご期待。

と、妄想を次回予告風に再現してみても状況はこれっぽちも変わりません。

状況を整理します。

私はオフ会の集合場所である鬼々骨駅にいます。急行も止まるそこそこ人が多い駅です。時刻は零時まえです。天気は晴れです。車やタクシーは止まっています。コンビニやドーナツ屋さんも営業中です。

そして、私は独りぼっちです。

こんなことがいったい、ありえるのでしょうか？ 否、ありえません。否、現実に起っています。否、そもそも現実ではなく小説かもしれません。否、それを言つたらおしまいです。こんな風に否定の連続で言葉遊びでもしないとやつていけません。

それほどの、異常事態です。

孤独。

よく一人で生きていけるタイプの人間もいる、と最近の中二病な作品であつたりしますが……本当にどうか？　本当に一人なんて、人間でいる限り無理な仮定です。魔法と同じです。孤独もファンタジーです。

そう、これはファンタジーです。あるいは、夢に違いありません。だって今、世界にいるのは私だけなんです。大げさな物言いですが、なぜか確信をもつて言えます。

いつもいつも、学校でも家でも私は一人でいる氣でいました。けど、違つたのです。私がいくら否定しても無視しても受け入れなくとも、隣を向けば、あるいは声を出せば誰かが来てくれたはずです。どうせ誰かがいる。

その状況に甘んじて、孤独なフリをしていた臆病者が私だつたのです。何も与えてないくせに、困つたときは何かをくれると期待していた卑怯者が私だつたのです。

孤独。

この不思議な空間に迷い込んでしまつて、初めて独りぼっちでいることに不安になりました。なんだか、私がいるということだって曖昧な気分になつてきます。我思うループ発動です。

「誰か……誰かいませんか？」

「誰かっ！」

「誰かっ！」

夜の街に私の叫び声だけが虚しく響きます。

もう一度呼ぼうと息を吸い込んだとき、後ろからカツンカツンと音が聞こえました。靴の音、のようです。誰かが近付いてきています。

安堵と不安と、淡い確信をもつて振り返ります。

「やあ、こんばんは。今宵は月が綺麗だね。って言つても、別に漱石先生流の告白とかそんな大層なものじやないよ。うん、オフ会日和つてこと」

背がひょろりと高い青年が立っていました。

白いロングTシャツに青いジーパン、というシンプルすぎる格好です。ですが極めて目を引く特徴がありました。髪が青かつたのです。まるで地の色のように自然に青い髪を軽く搔き上げながら青年が近付いてきます。

年齢はぱつと見わかりませんが、いろんな意味で青年といつ言葉が妥当な気がします。髪青いし。イメージカラーは青、あるいはラツキーカラーが青なのでしょう。そんなベタな馴熟落のようなセンスをもつてるのは、鬼の日記でONIKKEIと名付けてしまつ……。

「あ、あの……」

「そうです、私が変なアオオ一さんです」

人懐こい笑みを浮かべた目の前の青年こそが、アオオ一さんでした。

「え、えつと……」

「ん？ 何か聞いたそうな顔をしてるね。顔に書いてあるよ。いや、もちろん実際に書いてある訳じゃなくて言葉の綾だけだ」

当たり前です。

顔に書いてるわけないですし、アオオ一さんに聞きたいことはあります。

こんな誰もいなくなつた世界でも飄々としてるアオオ一さんは、何か知つてるはずです。

「けどさ、そのまえに君の名前を教えてよ」

「な、名前……」

あまり自分の名前は好きではないのですが。

そんなことより、事態の異常性が強くて今まで失念していましたが、目の前にいるのはアオオ一さんなのです。名前を聞かれ、改めてその事実を認識した感じです。

歳はあまり変わらないように見えます。実年齢は外見以上に高かつたとしても、それはそれで、なるほど永遠の十七歳というのを言ひ得て妙なのかもしません。

そして、まあ、言つてしまえば、イケメンです。

自分は面食いの部類ではないと思つていたのですが、格好いいことに越したことないとアオオ一さんの顔を見て思い直しました。

サイトやブログの内容を見て私はアオオ一さんに惹かれたわけですから、内面を重視してると言えなくもないですが。それでも、禿げ上がつた頭にズボンからお腹の肉がはみ出したオジサンが来たら少なからず失望してしまつたことでしょう。

嘘です。少なからず以上の失望をしてしまつたでしょう。大失望かもしれません。大失望つて書くと太公望に似てますよね。ともかく。これじゃあ、声優の顔がアニメのキャラより不細工だという人

たちと同じです。結構な自己嫌悪ですが、私は正直者なので反省はしません。

「それで、名前は？」

「わ、私の名前は……あ、あか、あかい」

緊張でどもつてしまい、自分の名前すら満足に言えません。

「うんうん、なるほど。あかい……赤い鬼。つまり、アカオ二くんだね」

違います。

ですが、これはこれでいいでしょう。

アカオ二とアオオ一。

これ以上ない組み合わせです。言靈は大事だとアオオ二さんも言つてました。このネーミングは遠回りなプロポーズなのかもしれません。月が綺麗だとも言つてましたし。その次は、あなたのためなら死んでもいい辺りでしょうか。文学的です。

アオオ二さんは人差し指で何かを数える素振りをしながら頷いてます。

「ひい、ふう、みい……。アカオ二くんを含めて参加者は七人か」「え？」

驚いて振り返ると、そこには年齢性別様々な六人がいました。いつの間に……。

さつきまで独りぼっちだったのに、急に賑やかになりました。眼鏡をかけたやる気のなさそうな若い男。半ズボンを履いてる小学生くらいの男の子。派手な化粧で露出が激しい女。口元を歪めて笑っている肥満体型の男。ぼそぼそ独り言を喋つてる制服姿の女の子。人を羨む視線を投げながら爪を噛むスーツの中年男性。

そして……私。

七人です。侍の数が大罪の数かおたくの数かわかりませんが、とにかく七人です。

参加者にこれといった傾向はありません。無相関という相関関係がある、などと統計学者的な屁理屈くらいは言えるかもしません

が。

それにしても小学生や中学生くらいの子もいるなんて、いいんでしょうか？ 親が心配したりしないのでしょうか？ 幸い、補導や職質の心配はありません。彼らが増えたところで世界は止まつたままなのですから。

そうなのです。人は増えましたが、それ以外はトワイライト不思議空間が継続中です。自分の携帯番号に電話をかけたら、もう一人の私が電話に出るくらいの空間です。気になつて携帯を確認してみると、案の定、お決まりのように圏外で検証しようがありませんけど。

「この闇ざされた世界に七人、いいえアオオニさんを入れて八人と一つのは多いのか少ないのか判断しにくいです。

急に、不安になつてしましました。

そもそも私に初対面の相手と仲良く談笑する能力なんてありません。アオオニさんのオフ会、といふことで他の参加者がいることに思い至らなかつた私の失策です。

「ねーねー」

「はい？」

見ると、小学生くらいの男の子がスカジャンの袖口を引っ張ります。買つたばかりのですから伸ばさないでほしいです。

だからといって、子どもだからといつ強力な免罪符をもつ相手を邪険にすることもできず、とりあえず適当に対応します。

「ボクたち、鬼なんでしょう？」

「まあ……アオオニさんの定義でいつたら私は鬼でしょうね。君のことまでは存じ上げませんが」

「ぞんじあげませんが？ ふうん、お姉ちゃん難しい言葉使つね

「よく言われます」

「わかりにくいけ」

「よく言われます」

私は対象年齢に合わせた言葉遣いをする気など毛頭ありません。

赤ん坊相手にも普段通り話すでしょ!。いないない、つていな  
わけありません、ちゃんとりますよ! と一人ノリツツ ノミをしな

がら赤ん坊をあやす自分の姿がありありと浮かびます。

「それでさ、ボク気になることがあるんだ。お姉ちゃん教えて」  
「……答えられる範囲で答えます」

「鬼の居ぬ間に洗濯つて言葉あるじやん? あれって、もし自分が  
鬼だったらどうなるの? 服、洗えないじやん」

「それは……困りましたね」

意味が全然違います。

「どう、アカオーくん?」

アオオーさんがにやにやしながら近付いてきました。一歩ずつア  
オオーさんが近付くにつれ、鼓動が速くなるのを感じます。どきど  
き。

「アカオーくんつて……もしかして、ショタ?」

「違います!」

別の意味で一気にマックスまで鼓動が速くなつてしましました。  
確かに男性向けの諸々の中では唯一ショタだけは嗜みますが、それ  
とこれとは話が別です。

「別です、きっと。」

「ねーねー、お兄ちゃん。ショタつて何?」

「ショウタロー・ロンフレックスの略でな、意味は」

「子どもに変なこと教えないで下せ!」

「ねーねー、お姉ちゃん。八方鬼入つて言葉あるじやん

「なんだか凄く強そうですね!」

そうでした、今日はツツ ノミ記念日でした。時刻は零時過ぎで日  
付は跨いでますので、ツツ ノミ後夜祭みたいな感じでしょ!。

「というわけで、ショタロンといつのは要約すれば半ズボン萌えな  
んだ」

「なんだか大胆に要約してますけど絶妙に違います!..」  
ちなみにここにいる男の子も半ズボンです。

特に萌えません。

……本当ですよ？

「ねーねー、お姉ちゃんはお弁当温めますか？ つてきかれたら」「ああ、はい」って答えたあとで別に温めなくても良かつたよなー外寒いし帰つたら温め直そつかなーって後悔するタイプ？」

「そうですけど小学生くらいの男の子に言わると何故かむかつきます！」

「むうー……」

いや、急にそんな子どもらしく拗ねられても。

この男の子は緑川さん並にいい性格をしてる気がします。

「ショタ受けつ！ ショタ受けーーつ！」

「いきなり奇声上げて誰ですかあなた！」

中学生くらいの制服姿の女の子がいきなり興奮しておかしくなりました。おそらく何かスイッチが入つてしまつたのでしょうか。ピンポイントで属性にクリティカルヒットしてしまつたのかもしだせん。

小学生 + 半ズボン + 「むうー」の三種の神器ですか。 そうですか。特に「むうー」のポイントが高いな、とわかりたくないことがわかります。

「うわっ、このお姉ちゃん目がマジだよーーー！」

「テケリ・リツ！ テケリ・リツ！」

小学生の男の子を追いかける女子中学生の図。ラブクラフト的奇声付き。

ここが鬼の世界だと黙つことをまざまざと感じじさせる光景です。思わず身震いします。現実と空想はしっかりと区別しなければなりません。

「さて、そろそろ歩くとしようか

アオオ二さんは何事もなかつたかのように平然と口にしました。やはり格が違います。私も見習つて、少しのことではツッコミを自重した方がいいかもしれません。オフ会の参加者以外は人が見当た

らないことなんて気にしたら負けかもしません。

けど……。

「あ、歩くつて、ど、どにに行くのですか？」

アオオニさんと対面するとツツコミ以外はどもつてしまつ女子高生がいます。私は。限定的かつ全く嬉しくない特徴です。「なーに、大地を力強く踏みしめるその一本の足があればどにでもいけるぞ。三百六十度全て道なんだよ」

「つまり行き先は決まってないんですか……」

独り言つぽくするどどもりませんでした。新たな発見ですが、これも嬉しくありません。

「行き先なんて些細な問題だよ」

チツチツチ、と人差し指をメトロホームのように揺らしながらアオオニさんが私の独り言に応えました。会話が成立したなら、独り言ではありません。初めてツツコミ以外でどもらなかつた、と前向きに認識を修正します。

「アカオニくんはちゃんとこのオフ会の主旨を覚えてるかい？このオフ会は百鬼夜行、もとい百奇夜行だよ。歩くことこそが目的さ。お喋りしながら夜道を歩きみんなで親睦を深めて……自分を知るんだよ」

「自分を知つてもうつ、じゃないんですか？」

参加者同士で親睦を深めるなら、そっちの方が適切な気がします。「ははは、まあ、そうとも言つな。僕は昔から受動態と能動態の区別がつかない病気なんだ。例えば、お腹空いたしカレーライスに食べられよう、とか」「とんだホラーですね！」

「僕の趣味はサッカーをされる」とです、とか「なんかイジメっぽいですね！」

受動態なのに主語を変えないからおかしくなるのです、とは面白くないからツツコミませんでした。勢いのツツコミか理屈のツツコミか、臨機応変でなければなりません。私のツツコミレベルが昨日

今日で上がりました。

何かを誤魔化された感じですが、アオオニさんと自然な会話（ボケとツッコミという明確な役割分担を自然だとすればですが）ができたので良しとしましょーつ。

「うわーーっ！」

「テケリ・リ・ショタ・ネクラノミコロンーーっ！」

まだやつてたんですね。それに叫び声が意味わからないですね。一足早く鬼ごっこをしていたショタとショタコンを追うようにアオオニさんが、次いで他の参加者が歩き始めました。

私も後に続きます。

ふと、空を見上げました。

そこにはいつもと変わらぬ美しい月が悠然と夜空に在りました。鬼しかいない不思議世界で、ただひとつ確定的なもの。やはり、お天道様よりお月様です。月はいつもと変わらない、けれど、いつも以上に鮮烈に、私の目に映りました。

「うひして、百奇夜行が始まりました。

アオオーさんのサイトを見て集まつた人たちがオフラインで会ったわけです。みなさん、年齢性別様々ですが、やはりミニチュア京極堂なのでしょうか。小粋な妖怪ジョークのひとつくらいに考えておいても損はなそうです。

私は、少し距離を置くようにして様子を見ています。  
いつものスタイルです。いつもの距離感です。

だけど、段々と気分が悪くなつてきました。正確には、苛ついてるのです。

何に、誰に苛ついてるのか、わかりそうでわかりません。  
嘘です。

わかつていますが、わからないふりをしています。  
よほど私が難しい顔をしていたのか、アオオーさんが心配そうな顔をして近寄つてきました。

「どうしたんだい、アカオニくん？ それじゃあ、まるつきり鬼じやないか」

「はあ……まあ……」

鬼じやないか、ってアオオーさんに言われました。

飄々としたアオオーさんのおかげで、私も毒氣を抜かれました。  
ちよつと、考えすぎてしまつたようです。

どちらかと言わなくとも社交的に見えるアオオーさんですが、やはり私とあるいは私たちと同じように鬼なのでしょうか。独りぼつちと感じてるのでしょうか。よくわかりません。

「お前に言われたくないよ、って顔してるねアカオニくん。まあ僕は鬼だけさ。けれど、アカオニくんはよくて半人半鬼つてところだよ」

「そう、でしょうか？」

「そりだよ。僕が鬼だからこそ、断言できる」

断言されました。

私は鬼なのでしょうか？ 人なのでしょうか？ よく、わかりません。

独りぼっちだと思つていました。

独りぼっちで、人でなしの鬼だと思つっていました。ふいに、友達の家に泊まりに行くと伝えたときの両親の顔を思い出します。きっと、私が思つていた以上に普段の私の様子を見ていたのでしょうか。

それに緑川さんとお話をしました。緑川さんは相手の隙を突くことで「ミニコニケーションをとろうとする人です。今日たまたま居眠りしたのをきっかけに話しかけてくれましたが、それはつまり、私を普段から見ていたということでしょう。

私は、独りぼっちだつたのでしょうか？

そう、思い込んでいただけだったのでないでしょうか？

無知は時として罪になると言つならば、私は重罪人なのかもしません。

一人で殻に閉じこもることで誰も傷つけることはない、そう思つていたのは……私の、罪？

そうです、簡単です。苛ついていた原因は、私自身が不甲斐ないからです。

優しい様子で目を細めて私を見ながら、アオオ二さんは続けました。

「ああ、まつたく……。僕はいつでも泣く鬼には弱いんだよ。仕方ない、仕方ないよなー。ちょっとだけ、ほんの少しだけ本気で仲間にしたいと思つたけど……。半人半鬼なら、鬼に引きずることもできると思つたし、この調子でいけばたぶんできたりうけど。やっぱり、君に鬼は似合わないよ、アカオ二くん」

独り言のようにぶつぶつと何事かを呟かれながら。すつ、とアオオ二さんに目尻を拭われました。

どきどきショーケーションです。この場面を網膜に焼き付けるべく眼を開きますが、視界が歪んで世界が霞んでいます。

ああ……泣いてるのですね、私は。

今、気がつきました。

「あの……どうして、私は泣いてるんでしょう？」

「それを僕に聞くのかい？ 答えられるのなら応えたいところだけど、残念ながら無理だよ。僕は、鬼だからね。正真正銘、掛け値なし、純度百パーセントの鬼だから……。そうだ、泣いた赤鬼って話、知ってるかい？」

私は黙つて頷きました。

人間と友達になりたい赤鬼くんのために青鬼くんが憎まれ役を買って出て一件落着、かと思ひきや青鬼くんは独りぼっちでどこかに旅に出て、それを悲しんだ赤鬼くんがわんわんと泣くことで終わる話だつたと思います。

「あの話はね、実話なんだ。もちろん青鬼は、この僕。多少脚色をされてる部分はあるし、ノンフィクションと言つべきじゃないけど、おおむねあんなことが大昔にあつたのは本当さ」「…………いやいや、それはどうなんでしょう？」

突拍子もない話でツッコミも冴えません。

記憶違ひじやなければ、そんな古い創作でもなかつた気がするんですが。

いや、これはアオオ二さんの設定なのかもしません。アオオ二さんがアオオ二さんを演じる上での設定だとしたら、突つ込むのは野暮というものでしきう。

「まあ、信じられないならそれでもいいか」

アオオ二さんはさして気分を害した様子もなく話を続けます。

「鬼はね、泣かないんだ」

「いきなり話を否定してませんか！」

「そんなことないさ。お話の最後にあるように、赤鬼くんは泣いた。

そして、鬼から人になつたんだ。独りぼつちじやなくなつた赤鬼く

んは人になり、独りぼっちで旅に出た青鬼はやつぱり鬼のままなんだ」

口角をにやりと上げてシニカルな笑みを作っていますが、そのアオオニさんの顔がなぜか悲しそうに見えたのは気のせいでしょうか。鬼は、独りぼっち。

青鬼くんは、アオオニさんは、独りぼっちなのでしょうか？  
そして、私は……。

「泣いた鬼の、泣いた半人半鬼の私は、人になれたんでしょうか？」  
「……すぐになれるさ。けど、一つ謝らないといけないことがある  
んだけど、ここに長居したら鬼になるよ。いやあ、「じめん」「じめん」  
「鬼に、なる……。そういうば疑問だつたんですが、ここはどこで  
すか？」

鬼々骨駅から結構な距離を歩いています。  
けれど、世界は依然として停止しています。

人が、他者が、不確かな自己を外部から補強してくれる確固なはずの世界そのものがあまりにも希薄な、ここはどこでしょうか？  
「本当にごめんね。うん、反省してる」

「いや、謝るまえに教えて下さい。ここは、どこですか？」  
「ここは……どう説明したらいいんだろうな」

青い髪をぽりぽりと搔きながら、アオオニさんは困った顔をしています。言いたいことはあるのに適切な言葉が見つからない様子です。

「……鬼の世界、と言つべきなのかな」  
「ここが、鬼の……？」

「だから、ここに長居したら、鬼になっちゃうんだ。一度鬼になつたら、正真正銘、掛け値なし、純度百パーセントの僕みたいな鬼になると、人間に戻ることはできない……。いやあ、鬼の世界と言うより僕の世界かな？　だから、悪いのは僕なんだけどね、ははは」  
軽快な笑い声は、ともすると薄情に聞こえますが、私は嫌な気持ちになりませんでした。アオオニさんが心では笑っていないことく

らい、鈍い私にもわかります。

人の温もりを感じない、時間を冷凍保存したような、そんな悲しい世界。

どうして私がここにいるのかも聞きたくなりましたが、聞きませんでした。

こんな超常現象のような現代科学と相容れない状況を生み出した術を聞いてもわからないかもしませんし、ここが鬼の世界、ここがアオオ二さんの世界だとしたら理由はなんとなく想像がついたからです。

「……アカオ二くんは、どうしてこんな奇妙な場所に、こんなつまらない孤独な世界に自分がいるのか、聞かないのかい？ 目の前にその犯人がいるのに」

「犯人ではありません。『芥川龍之介の桃太郎』の管理人であるアオオ二さんです。そして今日はオフ会だから、私はここにいるのです」

私は、なるべく笑顔で、即答しました。

あまり笑い慣れてないのでうまくいったかわかりませんが、この場合は笑った方がいいと思ったのです。もちろん、オフ会だからここにいるというのは事実です。アオオ二さんが求めていた答えとズれていることはわかつていますが、これでいいのです。

眉唾もいいところですし、アオオ二さんが正真正銘の鬼なのかはわかりませんが、もし仮に本当にここが鬼の世界であるならば……もしここに独りぼっちで生きていかなければならぬとしたら……。それは、とても寂しいことです。

それは、きっと耐えられない孤独です。

たとえ、鬼だとしても、鬼だから仕方ないと自分に言い聞かせても、誰かを、他者を誘いたくなる気持ちを否定することは私にはできません。

「そうか……本当に、アカオ二くんは優しいね。惚れそうだよ」  
「惚れそう、ですか」

顔面に血液が集中するのを自覚して、とつさに顔を下げる。

なんだか自然に会話してしまつていましたが、相手はあのアオオ一さんなのです。長身でイケメンで髪が青いのが目立ちすぎますが、どこか影のあるところも素敵な、あのアオオ一さんに惚れそうだと言わしめてしまったのです。

「アカオーくん……目を瞑つてくれないかな」

「ふへえツー？　いや、その、いきなりですか？　いろいろと心の準備というのも必要だつたりなかつたりしたたりしなかつたりしたり顔だつたりするんですが」

混乱して意味不明です。

目を瞑つて何をするのか、そんなの愚問でしょう。

一人きり（正確には他の参加者さんたちもいますが）で男性が女性に目を瞑ることを要求して、そのあとするのは……。

これはチャンスなのでしょうが、急すぎです。会つて間もない男女がその、キ、キス、なんて、アオオニさんとなら、嫌じやないですけど……。

「いきなりで申し訳ないけど、時間があんまりないからね。目を瞑つて、十秒数えてくれないかな？」

「あ……ああ、その、は、はい。わかり、ました」  
私も女です。

ここは覚悟を決めましょう。

十秒数えるというのはあまり漫画やアニメになかった条件ですが、最近流行の演出なのかもしれません。十秒数えてと言われたのに残り一秒くらいで不意打ち気味に、なんてドッキリ演出の可能性も否定できません。どきどき。

一世一代の大勝負のつもりで、きつく、ぎゅっと目を瞑ります。

「十……九……八……」

ゆくゆくとカウントします。

「七……六……五……」

「よーし、みんなー……」

アオオ二さんが何事か言つてますが、はつきり聞こえません。みんなとは他の参加者でしょつか？みんな、ここは僕たち一人きりにしてくれないか。なんて、そんな素敵な提案かもしません。どうぞ。

「四……三……二……」

神経を張り詰めます。

周りの気配が薄くなつたような気がします。本当に、他の参加者がいなくなつたのもしれません。

まるで、この場に私だけがいるような……。はて、それはおかしくないですか？

「一……零……！」

田を開けます。

そこには、誰もいませんでした。

誰も、いない？

アオオ二さんも含め、誰もいなくなつてしまつたのです。

「あのー」

きょろきょろ見回すと、みんな一斉に背中を向けて逃げてゐるのが見えました。

青い髪のひょろりとした青年、つまりアオオ二さんもです。

「あのー、アオオ二さん！」

大きな声で呼びかけると、アオオ二さんはぐるりと私に向き直り、通りの向こうから大声で答えてくれました。

「どうしたんだい、アカオ二くーん！早くみんなを追わないと！これは鬼ごっこだよー！アカオ二くんは、鬼ごっここの鬼だよー！」

「

「はああつー？ いつたい、どうじゅー」となんですか？」

「へ？ だつて田を瞑つて十秒数えるなんて鬼ごっここの鬼以外にないでしょー？」

そう言って、楽しそうに逃走を再開するアオオ二さん。

アオオ二さんの中では、「田を瞑つて十秒数えて」イコール「こ

れから鬼ごっこをしよう。鬼は君だよ」という意味なのでしょう。

そんな意訳が通じる相手がこの世界にどのくらいいるのでしょうか。

「……………本気で、怒ったかもしません」

私はこのとき鬼になつたのでした。いや、鬼など生温い。私は、修羅になつたのです。けけれ、一人残らず食べてやるのです。アオオニさんの骨の髓までスペアリブにして堪能してやるのです。ゴヤのサトルヌスを彷彿とさせるシルエットに今こそ変身を……。  
嘘です。嘘ですけど、無性に悔しくて腹立たしくて、鬼気迫る勢いで私は走り出したのでした。

一人目は簡単に捕まえました。

最初から逃げる気がなかつたのか、呆と立ち尽くしています。眼鏡をかけている、いかにも無気力ニートを絵に描いたような、若い男です。

「…………はあ…………僕には関係ないけどね…………人は人…………自分は自分…………はあ…………みんなが逃げたからって僕が逃げる理由にはならないよね…………どうせ僕は体力ないし…………走つて逃げても一番最初に捕まつたに違ひないよ…………はあ…………」

私がタッチする直前、男は心底どうでも良さそうにぼそぼそ呟いていました。そこはかとなく気持ち悪いです。けれど、これでこの人が鬼になる。鬼ごっこというのはタッチしたら鬼が交替するのが常ですから。些細なローカルルールがあつても、ここは揺るがないでしょう。

「捕まえました。これで…………え？」

そう、思つていきました。

これで、鬼じやなくなると思つていました。

「…………この場合は、どうすればいいんでしょう？」

困り果てたことに、私がタッチすると男は消えてしましました。跡形もなく。霧のように。私の掌に吸い込まれるように。消えたのです。

それと同時に、胸が少し苦しくなりました。心臓という針山にまち針を一本刺したような、ちっぽけですが確実な異物感があります。人は人、自分は自分と眼鏡の男は言つていました。確かにそうです、それを理由に無気力になつたり、始める前から結果を決めつけてはいけません。客観的に考えればとても簡単なことですが、けれど……。

頭が痛いです。

「どうも一筋縄ではいかなそうです。だからといって、ここで止まるわけにはいきません。一筋縄でも三筋縄でも、鬼ごっこは続けねばなりません。」

理由はわかりません。まだ。

二人目は、スーツを着たオジサンでした。

息も絶え絶え、車の通る心配のない交差点の真ん中で立ち止まつていました。

「やはり、駄目か……。若さには敵わないな、若さには。いくら私が努力しても、才能ある若者には勝てないよ。いいよな、君は。まだ何にでもなる可能性があるもんな。それに比べて私は……正直、羨ましいよ君のことが」

「……オジサンは」

私は、対話を試みました。

まるで自分自身に言い聞かせるように、鬼ごっこを忘れて、話しかけました。

「オジサンは変わらないんですか？ なりたい自分、強い自分に変われないんですか？」

「無理だろうね」

「どうしてですか！」

「……無理だろうね」

会話が成立しません。オジサンの「無理」には理由がないのかもしれません。

ともかく、交差点の真ん中で言つ台詞「じゃない」と思いました。まだ、オジサンはどこへでも好きなように行けるじゃないですか。

最初の一歩さえ踏み出せれば、簡単です。

最初の一歩というのが如何に困難か、私も知つてるとこに強気な発言です。

私という人間は、他人には厳しく自分には甘い人間だったのですよ。鬼です。鬼畜です。この発見は結構本気でショックだったりします。

なら……だからこそ、この鬼ごっこには意味があります。

「捕まえました……ああ、やつぱり、消えるんですね」

触れると同時にオジサンはいなくなりました。いつから私は人間掃除機になってしまったのでしょうか。針山の針が、一本増えます。時が凍つた世界の、他人の微熱すら感じない孤独な世界の、何かを象徴するようなスクランブル交差点で、私はしばらく呆然と立ち尽くしました。

頭が、痛くなります。

ここは、鬼の世界。

独りぼっちです。

ある意味、ラクなのかもしれません。

究極の引きこもりの完成です。

誰とも交わらず、誰とも混ざらず。

私が個室と呼ぶ、あるいは中一病っぽく、自我を強化し世界と隔絶した絶対空間と呼ぶものの強化版です。

あれ？ 理想の世界じゃないですか？

どうせ、私なんて変わりたいと思っても思うだけで、実際には変わることなんて無理なんですから。無理なものは無理です。理由なんて考えなくても、始めるまえから無理なのは確定的に明らかなのです。

「つて……本当に、私は自分に甘いんですね」

溜め息をついて。

私は最初の一歩を踏み出しました。

鈍い頭痛に耐えながら。

鬼ごっこを続けなければいけません。

まだ、私が鬼なのですから。

三人目と四人目は公園の広場にいました。

「これは……とてもアブノーマルです」

遊具がブランコしかない寂しい公園で、脂汗をかいだ肥満男が化粧の濃い気の強そうな女に傳っていました。一目で主従関係が明ら

かです。というより、完全にあっちの方向性の主従関係です。

「この豚野郎ッ！ キシヨイんだよッ！」

「ひいーつ！ 酷い！ 酷く…………いい」

いいのかよ！

思いきりツシ「コミ」たいところですが、あの肥満男には逆効果でしょう。かえつて喜ばれて泥沼化すること確実です。

派手な女は仁王立ちでふんぞり返っています。とても偉そうです。まるで世界の中心は私というジエスチャをしてるみたいです。

肥満男は土下座するような格好で女を見上げながら、やはづニヤニヤしています。

もしや、あの角度なら……。

「フヒヒ…………黒」

「死ねツ……」

果たして「死ね」と言ったのは私でしょうか若い女でしょうか。たぶん、私じゃないでしょうが（私ならせめて「生まれ変わって下さい」でしょう。それでも酷い物言いですが）、ともかく何かを叫んだのは事実のようです。

二人は私に気がついたらしく、顔を向けてます。

「あなた、誰よ？…………ああ、鬼だつたわね」

「フヒツ、女の子だ。現役女子高生の鬼つ子だ」

一人は私が鬼だと気づいても、逃げる様子がありません。もはや鬼ごっここのルールを忘れてるのかもしれません。

「鬼つ子ちゃんの格好可愛いね」

「はあ…………どうも」

肥満男が四つん這いのまま私の方にゴキブリよろしくな動きで近付いてきます。他人に可愛いねと言われ慣れていませんが、まったくドキドキしません。むしろムカムカします。

もし、アオオニさんに「可愛いね」と言われたら……。

想像するだけでドキドキです。

やはり、人間は（鬼もそうですが）見た目も重要だと痛感しました

た。南無。

「赤いスカジャンに黒いミニスカートにブーツ、そのアンバランスでエッジな組み合わせと、黒く凜々しいショートの髪と涼しげな瞳が醸し出すアンニコイな印象、攻撃的な格好と触れれば壊れそうな内面が作り出すパラドックス萌え……いい！ す、ぐくい！」

「……どうも」

気持ち悪いのですが、讃められること自体には悪い気はしません。特に緑川さんと一緒に選んだ服が讃められるのは、讃めてくれる相手こそ心外ですが、嬉しかったです。

「ちょ、ちょっと！ 豚野郎のくせに私よりそつちの鬼を選ぶの！」

「フヒヒ……オバサンより女子高生、中古より新品だよ、サーセン」

「な、なんですって！ キイイイイイイツ！」

ぴきん、と音が出そうなほど血管を浮き立たせながら若い女は金切り声を上げました。

「あんた！」

「私、ですか？」

派手な女は私を指差しながら、ずんずんと近付いてきます。どうやら怒りの矛先は私に向いたようです。白雪姫に林檎を食べさせる魔女のような顔をしています。常に自分が一番じゃなきゃ気に入らない様子です。

「あんたより私の方が綺麗じゃない！ どうして私が一番じゃないのよ！」

「それは、その、好みの問題かもしれませんよ？ ……全く自慢じやありませんが、私はソッチ方面の男の人には好まれる傾向があるようなのです」

「これは嘘ではありません。

関心がなかつたので詳細は覚えていませんが、内向的あるいは自己完結的ともいえる趣味をもつ人たちに限つて人気があるのです。私をアニメかゲームのキャラと勘違いしてたのでしょうか。元キャラを知りたいような知りたくないような、複雑な心境です。

なおも納得のいかない顔で、派手な女は私の胸ぐらを掴みました。「どうして！ 私は、私が特別じゃなきや嫌なの！ その他大勢じゃない、みんなが認める崇める存在じゃなきや！ どうして！ どうして……」

「落ち着いて下さい……あつ」

派手な女の身体を離そつと手が触れた瞬間、やはり影も形もなく消えました。

針山の針が、また一本。

「あーあ、消えちゃったね」

肥満男の眩きに、私は目を向けず應えます。

「そう、ですね」

「漏れみたいな便所虫は社会から消えても誰も気づかないどころか、むしろ世のため人のためになるのに、中古とはいえそこそこ綺麗な女人人が消えるなんて、フヒ、サーセン」

ふと、視線を遣ると、肥満男が「ヤニヤしてるのに気がつきました。

土下座するようなあの角度なら……。

「フヒヒ…………白」

「一度死ねッ！」

咄嗟に出たのは「生まれ変わつて下さい」ではなく「一度死ね」でした。

そして、思わず、蹴つてしまいました。

人生で初の暴力を振るつた相手は、どういうわけか少し嬉しそうな顔をしながら、消えていました。手以外の接触もカウントされる武闘派鬼ごっこです。これで一気に針が一本増えました。なんとなく、針のからくりには気づいてます……。

私はこう見えて頭の回る方ですから。

そうです。天才肌と言つても過言じやありません。きっと神さまに選ばれた特別な存在なのです。

学校の勉強でわからないところはありません。一度、五教科全て

のテストで満点をとつたら、次の期末が明らかに難易度が高くなってしまい同級生に非難の目を浴びせられたことがあります。それ以来、たまにわざと間違えたりするくらいです。

授業中ノートを一生懸命するのは、それでもしないと示しがつかないからです。居眠りなんかして百点だつたら贅躉ものです。これも経験から学びました。世間体を考える天才肌なのです。

だから、他人が私のことを理解してくれないとしたら、それは相手が悪いのであって私には非がありません。

嘘です。私みたいな便所虫のことを、日々を楽しく過ごしてらっしゃる他の皆様に理解できるはずもありませんし、理解する必要もありません。勉強しか能のない暗く妄想大好きな人間失格を擬人化した私は、ひとつそりと消えるか死ぬかを選択した方がいいのかもしれません。

友達も……いません。一瞬だけ緑川さんの顔が浮かびましたが、彼女はクラス委員長としての同情から気まぐれで声をかけていただけいた可能性を否定できません。私は虫、私は鬼、所詮は人と相容れない存在なのです。

だから、他人が私のことを理解してくれないとしたら、それは私が悪いのであって相手には非がありません。

自尊心と劣等感がない交ぜになつたマーブル模様が、頭の中をぐるぐる回っています。

まるで、ルビンの壺のようです。

自尊心に目を向けると劣等感が地になり、劣等感に目を向けると自尊心が地になる。そんなトリックアートを強引に見せられてる感じです。

「もしくは……これは、ただの鏡なのかもしません

四本の針を心の臓に刺したまま、私は鬼ごっこを続けます。

誰か、私以外の誰かがいれば、この頭痛は治まる。そんな確信があるのです。我思うループを脱するには、他者の存在しかありません。

たとえそれが、幻であつたとしても、今の私には必要です。

私は走りました。

孤独から逃れるように。

どこまで行つても他者の温もりを、その空気が含む微かな微熱さえ殺してしまつたような、閑ざされた悲しい世界で、私は……。

これが、私の求めていた理想郷なのでしょうか？

アオオニさんは、私のメシアなのでしょうか？

「……わかりません。けれど、たぶん、私が求めるのは、もつと

息も切れ、頭痛も耐えられなくなってきた頃、やっと見つけました。

五人目は、あの半ズボンを履いた小学生くらいの男の子でした。車の影すら見えない横断歩道で、律儀にも手を上げて渡つています。滑稽なほど素直です。

「あつ！ 鬼だ！」

私の姿を見つけるなり、全速力で逃げていきました。

私も走ります。逃げられたら追いたくなるというのは本当です。

初めて鬼ごっこになりました。

「待ちなさい！」

気分を出すために言つてみます。

「わかつた！」

元気のいい声で応えて、少年は止まりました。

素直です。素直すぎです。

桜の枝を折つたらすぐ謝るタイプなのは賞賛に値しますが、時と場合によると思います。

「あの、どうして止まるんですか?」

「え? だって、お姉ちゃんが待ちなさいって言つたから」「けれど、鬼じゃこないので逃げてもらわなければ困ります」

「どうして、困るの?」

「それは……」

どうしてでしょう? 鬼としては、一刻も早く捕まえた方がいいに決まっています。そういうゲームなのですから。たとえ、触れれば消えてしまう相手だとしても。

「お姉ちゃんは、鬼なんでしょう? ボクを捕まえるんでしょう? どうして、鬼は鬼じゃない人を追うのかな?」

「それは……悲しいからです、たぶん」

ふと口を出た言葉に、私も驚きました。

悲しい? 鬼が? それとも私が?

「どうして、悲しいのに逃げてもらわなければ困るの?」

「……ゲームだからです」

「どうして、そういうゲームなの?」

「それは……」

「鬼は、怖いの? 人と触れ合いたいのに、人に触れるのが怖いの?」

「そう、かもしません」

「じゃあ、鬼は結局どうしたいの? お姉ちゃんは結局どうしたいの? このままでいいの? ボクは一体、どうすればいいの? 逃げればいいの? 捕まればいいの?」

「私は……どうしたいのでしょう?」

「どうして、どうしたいのかわからないの?」

「この少年は、素直です。」

なんにでも疑問をもって、理由を求めて、終わらない問いを続けて、まるで、私自身が果てのない自問自答をして、アオオニさん風

に表現するなら我思うループに陥つてゐるような、そんな感覚です。

ああ、そうなのです。

この鬼ごつこは、最初から。

「私とアオオニさん、一人だけだつたのです。だから、私はアオオニさんを探します」 「じゃあ、ボクはどうすればいいの？」

私は、少年の頭に手を載せました。

「とつとと私に戻つて下さい、素直で愚直な私」

少年は、消えました。いいえ、正確には消えたのではなく戻つたのです。私の中に。こうして、針山の針が一本増えます。

私は、寂しいのです。

私は、怖いのです。

そうです……私は鬼ですから。自意識過剰の鬼ですから。他人にどう見られるのか、どこかおかしいところがないか、気にするあまり人と会話することが苦手になり億劫になり、それでいて寂しがりの鬼ですから。

人つ子一人見当たらない孤独な世界を、私の分身となるオフ会の参加者たちを、アオオニさんが作り出したのか私が作り出したのか、それともアオオニさん含め全て私が想像した一人芝居なのか、わかりません。

お芝居だったら、観客はいるのでしょうか？

私が右往左往してゐるのを、どこかでポップコーンを片手に見て笑つてるのでしょうか？

そんな映画を見たこともありますが、特に驚きも感動もしませんでした。

なんせ、私は小さい頃からそんな妄想に取り憑かれてましたから。私は、誰なのでしょうか？ 本当に両親の子どもなのでしょうか？ 実は私以外の人間は既に宇宙人と入れ替わつていて、私という人間を影で観察してゐるのではないでしょうか？ 世界に私以外は存在せず、この私の脳だけが水槽の中でプカプカと浮かんで夢見てるだけなのではないでしょうか？

小学校に入学するまえから、私はこんなことを独りで考えては恐怖していました。

だから、他者が必要ないと孤独を選んだのでしょうか？ この世界は、やはり私にとっての理想郷なのでしょうか？

「それは……半分本当に半分嘘です」

私は歩き始めました。

頭痛が酷くなつたからです。

この頭痛は、誰かを必要としてる私の半分が訴えているのです。誰かを捕まえる、誰かに心を開け、もつと自分をさらけ出せと訴えているのです。

私の半分は、この孤独な世界から一刻も早く出だがつていいのです。いいえ、半分以上の私が、もう気づいていいのです。この世界が行き止まりだということを。ここにいたら先がないということを。コンビニで六人目を発見しました。中学生くらいの制服姿の女の子です。

漫画雑誌を一人で立ち読みしながらニヤニヤしています。

こちらには気づいてなかつたようなので、私は声をかけず後ろから肩を叩きました。ちょっと反則っぽいですが、私は早くアオオニさんを追いたいのです。そのためには、私はしっかりと私でなければなりません。

これで、針山の針は六本です。

なんとなく、女の子が読んでいた雑誌を手に取りました。予想がつかなかつたと言えば嘘になりますが、私の好きな漫画雑誌です。不思議なことに、随分と古いバックナンバーです。

棚を見ると、私が読んでいたお気に入りの雑誌や漫画本が所狭しと並んでいます。コンビニなのにおかしいなと思いつつ、ついつい手が伸びてしまいました。

「あつ、これ懐かしい」

好きな漫画に囲まれて、読まない理由はありません。  
しばし時間を忘れて読みふけることにします。

お店の人に悪いかなと思わなくもなかつたですが、飲み物やお菓子も頂きながら漫画三昧です。誰もいないこの世界だからこそできる贅沢です。夜更かしを咎める親もいないのでですから。

あれ？ ここは案外に理想郷かもしません。

そういえば、あの頭痛も治まりました。

現実から目を背け妄想の世界に逃げ込むことで、頭痛を回避できるのでしょうか。そうだったら、このコンビニに引き籠ることもやぶさかではないです。

妄想は優しいです、いつでも。

どんな卑屈になつても、どんな自分が嫌いになつても、想像の翼一つで私はスーパーガールです。完璧に完成した完結な世界で、私は自分とは似ても似つかぬ、あるいはどこか似た登場人物に自分を投影し、現実では叶えられない大冒険に心躍らせるのです。

ふと、漫画から目を上げました。

高校生くらいの女の子がいました。

漫画雑誌を一人で立ち読みしながら一ヤーヤしています。

コンビニのガラスに映った、私です。

「……とても、自己嫌悪です」

途端に、頭痛がやつきました。

私は脇目も触れずコンビニを走り出て、鬼ごっこを続けました。

あとは、アオオ二さんだけです。

アオオ二さんも、やはり消えてしまうのでしょうか？ アオオ二さんこそが、私の七本目の針なのでしょうか？ それとも……。

「はあ……くつ……」

田頃の運動不足がたたり、すぐに息が切れてしまいました。けれど、足を止めるわけにはいきません。私は鬼ですから。私は弱いですから。この足を一度止めたら、たぶんもう動けなくなります。この誰もいない寂しい世界こそが、安住の地であると本気で考えたくもなります。

アオオニさんと二人なのか、それとも、どう足搔いてもここは私ひとりぼっちの妄想ワールドなのかわかりませんが、とにかく行き止まりなのです。

行き止まりでは、前に進むことはできません。

そうです、私は、変わりたいのです。

緑川さんは癖のある性格をしていますが、なんだか友達になれるそうな気がします。お互い不器用で、本気で付き合おうとすればするほどすれ違いが多いですが、それも悪くありません。そういうたずれ違いこそ、いかにも友達っぽいじゃないですか。

両親にはとても心配をかけているようです。心配をかけないために成績を良くして、なんてことはとうの昔にお見通しなのでしょう。友達の家に泊まると言つた嘘は、嬉しさのあまり見抜けなかつたのかかもしれません。私は、親不孝娘です。だからこそ、これら自律して一人前になりたいのです。変わりたいのです。

「私は……私はツ！」

走ります。

車のない幹線道路を。

公園の広場を。

学校の前を。

体中にべつたりと汗をかき、呼吸音がかしましいほど息を荒げ、

私は探しました。アオオニさんを、いえ、誰でもいいのです。緑川

さんでも両親でも名前の知らないクラスメイトでも、私の存在を許してくれる他者さえいれば。

鬼ごっここの鬼は、寂しいから人を追うのだとことを、実感しました。誰かに触りたい一心で、逃げる人を追うのです。

「私は……ッ」

ここ一ヶ月の運動量を足し合わせたようなマラソンで、私の足は棒になりそうでした。

走れなければ、歩くしかありません。

ブーツで走るというのも無謀だったな、と今更思いました。私は緑川さんと選んだ勝負服を着ているのです。ミニスカートだったの走つてるときお見苦しいものをチラつかせたかもしませんが、見てる人がいないのが幸いです。

無我夢中で走つて辿り着いたのは、集合場所である鬼々骨駅前でした。

オフ会で集まつたのは、結局私だけだったのでしょうか。そもそも、アオオニさんのサイトすら私が妄想したものなのでしょうか。孤独な自分を鬼だと自称し、中一病全開で多重人格運営サイトでもしてたのでしょうか。

疑問は尽きませんが、そんなことより、私は……。

私は、いじけるのを止めます。

「私はッ、私は人間です！ 私は、鬼なんかになりたくありません！ 弱いですし、甘いですし、臆病ですし、自分勝手ですし、その他諸々ダメダメですけど、鬼は嫌です！ 独りぼっちは嫌です！ だから、だから……。早くアオオニさん、ここから、出して下さいッ！」

生まれて初めてお腹の底から声を出し、私は足を止めました。

もう一步も動けそうにありません。タイムリミットがあるならばお手上げです。

けれど、アオオニさんは来ると確信していました。  
今の私は……。

「やれやれ、本当に僕は……」

「後ろから誰かが近付いてきます。

「本当に僕は、今も昔も泣く鬼には弱いんだよ」

今の私は、顔がぐちゃぐちゃになるほど泣いていたのでした。それでアオオニさんが現れない道理がありません。振り向くと、青い髪をポリポリ搔きながら歩いているアオオニさんがいました。

「このままこいつそり隠れてタイムアップ狙いでアカオニくんを鬼にしようかと欲が出たけど、やつぱりナシだ。アカオニくんは、鬼ではなくて人間になるべきなんだ。やつぱりね。僕みたいに生まれながらの鬼とは違うんだから」

「あの……」

私は、どうしても聞かなければなりませんでした。

「あの、アオオニさんは……私、ですか？」

「ははは、面白い質問だねアカオニくん。僕は、アオオニだよ。アカオニくんじゃない。ただの……しがない本物の鬼さ」

アオオニさんは快活に笑いながら答えました。

その笑顔はあまりにも透き通っていて曇りのないものでしたが、アオオニさんが心の底から笑っていると思えるほど私もおめでたくはありません。

私も、やはり鬼の端くれなのですから。気持ちはわかるのです。どんなに強がっても、どんなに孤独を愛しても、どんなに否定してたくても。

寂しいのです、私たちは。

「アオオニさんは、逃げないんですか？　これは鬼じつこですよ？　さつきみたいに隠れて逃げ切つてタイムアウト勝ちを狙うのが、むしろ正々堂々の勝負なのではありますか？　そうしたら……」

「そうしたら、アカオニくんが本物の鬼になってしまいますよ」

「それは……嫌です」

「だろ？　僕は自分をこれ以上嫌いになりたくないんだよ」

「けど、私が鬼になれば、鬼は一人です。一人なら、独りではあり

ません。きっとそれは、鬼じゃ、ありません。鬼だけど、鬼じゃなくて、その、きっと新しい何かです。シミコレーションゲームにおける黄色いユニット的な第三勢力になれるはずです

「アカオ二くん、気持ちは嬉しいけど、言つてることがめちゃくちゃだよ」

自分でも支離滅裂なことを言つてる自覚はあります。

けど、このまま私が元の世界に戻つて終わるのは、違うと思ったのです。私の人生の物語において、演出脚本主演すべてをオールマイティにこなす私の生き方において、ただ鬼から人になつてオシマイにしたくないという思いが強くなつてきました。

きっと、私は変わりつつある。

緑川さんと話して、両親に心配をかけてたのに気付いて、自分自身の嫌な鬼と向かい合つて、そして、アオオ二さんと出逢つて。

この前兆を逃したくありません。間違つてBボタン連打して進化をキャンセルするなんて言語道断。私は、私は……もう、袋小路から抜け出したい！ できることなら、アオオ二さんと一緒に！

私はアオオ二さんへ近付きます。

一步、さらに一步。

軽く手を伸ばせば届くような距離まで近付いて、私は軽く顎を上げてアオオ二さんを見上げます。

しばらく見つめ合つ格好になります。どきどき。動悸が激しいのは走り続けたからだけではありません。これを恋と呼べるかわかりませんが、同情なんて言葉で片付けたくない何かしらがあります。さきに田を逸らしたのは、意外にもアオオ二さんでした。

「これで、ゲームセットだね。アカオ二くんは鬼から人間になつて、僕は鬼のまま。いつぞやと同じ出来事をなぞるだけ……。歴史は繰り返す、ってことさ」

「歴史は繰り返す、なんて人間の言葉です。鬼のアオオ二さんに当てはまるとは限りません」

私は右手でアオオ二さんの左手を掴みます。よし、大丈夫。アオ

オーラんは連れませんでした。あと、もう一回。

とても優しい、けれど、何か諦めたような悟りきつた笑顔でアオ  
オニさんは肩をすくめました。

「これで鬼ごっこは終わり……」

「いいえ、まだです」

「これが、たつた一つの冴えたやり方であることを祈りながら。私は空いてる手で、アオオーさんのもう片方の手を握りました。私の行動の意図がわからなかつたのか、アオオーさんは苦笑いしています。

大丈夫、僕は君じゃない。ただの……孤独な鬼だよ

私は、また泣いていました。泣きながらも、必死にアオオ二さん

に伝えなければいけません。

格好悪くとも、私は、生きたいと思えるようになつたんだから。少しくらい、欲張りにもなります。

……人という字が支え合って居るのか寄りかかって居るのか、私にはつかつません。とにかく、自分以外の誰かが必要だつて言うな

- 1 -

泣きながら、顔を真っ赤にしながら、私はアオオニさんにキスをしました。

自分自身でも驚くほど衝動的に、なのに百年もまえから予行練習していたくらい自然に唇を合わせました。ファーストキスは、レモンの味でもママーレードの味でもなく、涙で塩辛いだけでした。ゆっくり顔を離し、それでもお互いの呼吸を肌で感じる距離で、

私は言葉を続けます。

「アオオ二さんの誰かに、私がなることはできませんか？」  
言いました。

一生分の奇跡をここで使ってしまつたくらいの確率で、私はども

らずに言いたいことを言い切りました。

けれど、ドラマみたいに格好良くなはありません。鏡で見るまでもなく、私の顔は涙や鼻汁でぐちゃぐちゃで、衝動的なファーストキスで夜道を照らすほど赤くなっていることは確実です。

これで、いいのです。

今私は、どうしようもなく生きてる実感があります。

もう、便所虫だなんて卑下しません。

もう、独りが悲しいと正直に言つてしまします。

もう、自分にも他人にも悲しい嘘はつきたくないかもしれません。

親に心配しないで大丈夫と言いたいです。緑川さんに友達になつてほしいと言いたいです。アオオ二さんには……言いたいことの半分くらいは言えました。

アオオ二さんは、呆気にとられた表情で三秒ほど固まつてから、天を仰ぎます。

「あー、まつたく。これじゃあ……」

しゃくり上げるような声を飲み込みながら、そのままボスンと私の肩に顔を乗せました。泣くのを、どうにかこうにか堪えてるのでしょうか。まるで小さい男の子が、ただ意地を張るために無理をしてるみたいに。

アオオ二さんの鼻が、私の鎖骨と肩の合間にあるくつこみにぴたりとはまります。

頭一個分はアオオ二の方方が背が高いのに、今ではこんなにも重なっています。

冷静になれば顔から火が出るくらいなシチュエーションですが、はじらい中枢は少しまえから麻痺しています。

ああ、なるほど。

なんだか、ふと実感しました。

生きる重みを誰かに預けること、それが、人間の定めなのです。一人きりだと鬼です。

誰かに触れたいのに、同時に触れるのをビンカで避けている、鬼

「」この鬼です。

家族でも友人でも恋人でも、自分の重みを預けられるような誰かが、人間には必要なのです。なら、アオオニさんも……。

もう一押し、気の利いた言葉をかけなければ。

そう思うのですが、何も思い浮かびません。

だから代わりに、私はぎゅっと、アオオニさんを抱きしめました。うまく言葉にできなくても、私はここにいるということを、アオオニさんにわかつてもらいたかったのです。

腕の中のアオオニさんは、生まれたての子鹿のように震え出しました。

そして。

「ああああああああああああーっ！」

天まで届くような大声を上げました。

それは、産声のよう。

「ああああああああああーっ！」

私も真似してお腹の底から声を上げました。そうです。アオオニさんも、そして、私も。新しく生まれ変わるので。ふて腐れるのは、もう止めです。こんな行き止まりには、未来がありません。こんな心配事も厄介」ともない世界には、未練もありません。

「えつ……」

目が眩むほどの光が空から差し込んできました。

ステンドグラスのように光を鮮やかに透過しながら、空の欠片が雪のように降ります。

きっと、この世界は壊れたのです。

鬼の世界は、これきりです。

私はアオオニさんを離さないよつに腕に力を入れ直し、強く、強く田を開きました。

私の眠りを覚ましたのは、王子様の接吻ではなく目覚まし時計のベルでした。

いつも通りの自分の部屋。

いつも通りの水玉のパジャマ。  
これは……これは見覚えのある展開です。物語の禁じ手の一つと  
言われる、けれど、一部のギャグマンガではむしろ王道かもしれな  
いという、アノ……。

「……はあ。まさか、夢オチなんですか？」

芋虫のようにベッドからどうにか這い出ると、いつもよりひょり  
とだけ乱暴に目覚ましを止めました。

本当に、あれは夢だったのでしょうか。

記憶は、あります。

アオオーさんのオフ会に行って、誰もいない寂しい世界で心細くなつて、なんだかわからぬまま鬼ごっこをして、触つたらみんな消えちゃつて、アオオーさんとなんだかいい雰囲気になつたと思つたら、空がなくなつて今に至るわけです。

はい、現実的に考えたら夢以外の何物でもありませんね。特に、  
私みたいな女がアオオーさんみたいなイケメンといい雰囲気になる  
ところが。孤独な世界とか人が消えたりとか空が割れたりよりもフ  
アンタジイです。

予感めいたモノを感じながら私はPCを立ち上げて『芥川龍之介  
の河童』にアクセスします。画面には虚しく『404 File  
Not Found』とHラーが出ました。

タイミングが悪かつた可能性もわずかにあるので何度もF5を押  
して再読み込みましたが、結果は変わりません。

「困りました……。中一病をこじらせてとてもリアルな妄想を見る  
よくなつてしまつたのでしきつか。だとしたら……いろいろと末

期です」

アオオニさんは、私が作り出したオリキャラだつたりするのでしようか。

私の隠された人格が、私の知らぬ間にホームページを作つたりしていたのでしょうか。

もしかしたら、緑川さんすら仮想のクラスメイトだつたりしないでしきうね。不安になつて部屋をきょろきょろと見回すと、あの赤いスカジャンがハンガーに掛かっていました。全く不釣り合いのフリフリミニスカートもその下に丁寧に置んであります。

近付いてみると、スカジャンの左肩だけが不自然に濡れています。どうしてここだけ濡れてるかなと考えて、思い至りました。夢じやなかつたのかもしれない確率が、わずかに上がります。なんだ……アオオニさん、泣いてたんじやないですか。

リビングで母親と出くわしました。ちょうど朝食の準備が終わつたところのようです。食卓に並べられた赤飯は昨日の残りですか。そこは是非とも夢で良かつたのですが。

「あら、いつの間に帰つてたの？」

「いつの間にか帰つていたのです」

正直に答えると、母親はなぜか嬉しそうに頷くと、私の分の朝食を用意してくれました。父親はやや氣むずかしそうな顔をして赤飯とにらめっこをしています。

「紅子、ちょっと座りなさい」

「あ、はい」

言われなくても座りますけど、と心の中で軽く愚痴りながらも素直に座ることにします。赤井紅子という戦隊モノのリーダーも道を譲るほどレッドな名前を付けた張本人の対面に腰を下ろします。

「あー、そのー、うん……。友達は大切にするんだぞ」

「……はい」

父親は赤飯を見つめながらぽつぽつと語り始めました。

「紅子は、小さい頃から感受性が豊かというか、ちょっと考えすぎ  
るきらいがあるからな。もうちょっと肩の力抜いて、その一、まあ、  
友達付き合いをした方がいいと、父さん思うんだ。覚えてるか？」

小学校に入学したばかりのときも……」

それから、父親は珍しく饒舌に、とても懐かしそうにとても愛お  
しそうに、私の思い出を聞かせてくれました。仕事が忙しくて、私  
のことなんてさほど興味がないと思っていた父親が、ともすれば私  
より鮮明に私の思い出を覚えているなんて驚きです。

きっと、父親にも知らぬ間に心配をかけていたのでしょうか。

それでも、私のことをこんなにも優しい顔で語ってくれるなんて。  
「だからな、友達を大切にするんだぞ」

私は黙つて頷いて、俯いたまま赤飯を口に運びます。今、顔を上  
げることはできません。ああ、この赤飯なかなか塩味がきいてます  
ね。うん。駄目です、本当に。涙もろくなってしまったようです。  
涙で、塩辛いです。

「……ごちそうさまです」

席を立ち、けれど、そのままこの空間を去るのはなんだか惜しい  
気もして私は立ち止まってしまいました。

「どうかしたの？」

母親が気遣わしげに声をかけてくれます。

大きく一回深呼吸をして、私は答えます。

「今度……ウチに友達を連れて来てもいいですか？ お泊まりです」

「……ああ、もちろん」

声を合わして承諾してくれた両親に、またしても涙を溢しそうに  
なりながら、私は早足で学校に向かいました。

教室に着くとすぐに、私は緑川さんのところに行きました。善は急げです。

「おはよひびきやります、緑川さん」

「あつ、おはよー」

挨拶もそこそこに、緑川さんは相撲の立ち会いみたいな前傾姿勢をとりながら好奇の目を向けてきました。

「で、でー！ 昨日の初勝負はどうだったの？ 勝負服は役に立つた？ ねえ、ねえ！」

「ちよ、ちよっと落ち着いてください」

闘牛士よろしく緑川さんの口撃をいなしながら、私はこの勢いを自分に味方にしてしまった。ちょっとの勇気さえあれば、私たちはきっといい友達になれるはずなのです。

「それについての話はプライベートなので、ここでは話したくありません」

「ぶー、赤井さんのケチ！」

口ではそう言つておきながら、緑川さんはどこかホッとしてるよう見えるのは氣のせいでしょうか。

誰かのプライベートを聞くことは、自分に他者を取り入れるということです。いつか失うかもしれない繋がりを持つことに、緑川さんは怯えるのではないでしょうか。私も、そうです。だけど、怯えていたつて行き止まりです。その世界は、もう卒業しました。

私は泣いた赤鬼です。

格好悪くとも、誰かに頼つたり、時には頼られたりしながら生きたいのです。

私はちょっと勉強ができるだけの、卑屈で無口で友達の少ない、両親に心配をかけまくりでATフィールドで他人を避けてきた泣き虫で臆病な……ただの人間なんです。

それに気づいたら、あとは一歩前に進めばいいだけです。

「緑川さん……だから、その、プライベートな話なので、プライベートな場所でなら話すのもやぶさかではないという意味です」

「ん？ どういう意味？」

「だから……あー、今晚、私の家でお泊まりして語り明かしましょうといつことです」

「……えっ？ お泊まりって？」

まるでネッシーが一足歩行してゐるのを田撃したくらい呆けた顔で、緑川さんは私を見つめています。UMAに見間違えられるのは一回目なので、このくらいでは私も動じません。

「お泊まりは、お泊まりです。私の家に緑川さんを、友達として招待したいのです」

「ともだち？ 私なんかが？」

「緑川さんだから、です」

「ともだち……」

噛み締めるよひに咳きながら、緑川さんは顔を伏せました。  
友達。

なんか青臭い響きがあるので今まで使わなかつた言葉ですが、口にしてみると案外いいものです。

「緑川さん、友達になりました」

「…………」十一分に溜めてから。「うん」

緑川さんは頷きました。そしておずおずと、やや照れた表情で続けます。

「じゃあ、赤井さんのこと、紅子ちゃん、って呼んでいい？」

「え？ ええ、もちろんいいです」

紅子ちゃん、なんて親以外から言われたのは久しぶりかもしだせん。

あまり自分の名前が好きじゃなかつたのに、ちょっとだけ好きなれた気がします。

「緑川さんのことは、なんて呼べばいいんですか？」

「うーん、別にそのままでもいいよ」

「それだと不平等です。残念ながら緑川さんのファーストネームを知らないので、教えてくれると嬉しいです」

なぜか躊躇するよつこ、おずおずと緑川さんは答えました。

「……縁結びの縁で、コカリ……」

「なるほど……」

私とは違つ意味で、絶妙な組み合わせの名前です。けれどシンメトリイ的アシンメトリイな字面は、なんとなく緑川さんに合つてる気もします。緑川縁、一度心の中でリハーサルしてから、私は名前を呼びました。

「縁、ちゃん。これで大丈夫でしょうか?」

「うん……。紅子ちゃん。じゃあ、その……本当に今日、紅子ちゃんの家にお邪魔していいの?」

「全然問題ありません。きっと両親も喜ぶじで一等切たるより大喜びするはずです」

「そんなー、大げさだよー」

本当にそれくらい喜びそうのが恐いところですが、あとは野となれ山となれます。

「けど楽しみだなー、お泊まり。ねえねえ、お泊まりって何が必要かな? エチケット袋はもつてつた方がいいかな? 非常食は? 熊避けの鈴なんかもあつた方がいい? キャリーバッグにするか、逃げるとき大変かな?」

「残念ながらウチは一般的な住宅街にありますから、きっとパジャマや歯ブラシくらいで充分事足りると思います」

「なんか、こういうのいいね」

唐突な、けれどしみじみとした緑川さんの言葉に、私は頷きます。照れ臭いです。

元アカオニは伊達じゃないつてほど、私の顔は赤いことでしょう。というか、乙女みたいに頬を赤らめいでいたら、本気でそっちの道に行ってしまいそうです。教室内の注目を集めてる気がしないでも

ないですし。薔薇ですか？ 背景は薔薇なんですか？

かける言葉もなく、なんとなしに緑川さん、いえ縁ちゃんを見つめ合います。

「……」

「……」

「……」

「……」

「いえいえ、ほつ、てなんですか！」

「駄目だよー。ボケるのは私で、紅子ちゃんはツツコミでしょ  
「どちら辺がボケなんですか！？ てか、このやり取り昨日もありましたよね！」

こういった会話も、思えば友達みたいです。

いえ、みたい、じゃなくともう友達なのです。

ちょっと勇気を出して一步踏み込めば、お互いのアーフィールドは中和されるのです。そつやつて、たまには喧嘩するときもあるかもしれませんが、一歩ずつ一歩ずつ、私たちは友達らしい経験を積み重ねていくんだと思います。

「悪く、ないです」

「ん？ なにが？」

私が漏らした言葉に、縁ちゃんが反応します。けど、さすがに思つたこと全部伝えるのは憚られるので、要約してしまいます。

「友達つて、悪くないなと思つていたところです」

「えつ……つん、そうだね。紅子ちゃんつて、たまに結構恥ずかしいこと涼しい顔で言つよね」

「そうでしょうか？」

改めて指摘される方が恥ずかしいのですが。

友達。そうです。人は、一人では生きていけないのです。

家族でも、友人でも、その他顔を見たことすらない人々との繋が

りさえも、きっと私が私であるために必要なのでしょうか。だって、私は鬼ではなく人間なのですから。

当たり前で大切なことを教えてくれたアオオニさんが、ここにないことは残念ですけど、きっと……。

そんなことを私が考えると、縁ちゃんが、ぱん、と手を一回叩きました。あ、そうだ。忘れてた。のジエスチヤだと推測します。

「あ、そうだ。忘れてた」

当たりました、と密かにガツツポーズです。

「何を忘れてたんですか？」

「ふふふつ……聞いて驚け、なんとこんな半端な時期に転校生が来たのだ！」

「転校生？」

なんだか、予感が、いい予感がします。

「クラス委員長として一足先に挨拶したんだけど、なんだかひょろつと背が高くてニヤニヤ笑つて爽やかな感じの男子だつたよー」

「あのっ！ その、髪は、どんなでした？」

私は声が大きくなるのを抑えられませんでした。縁ちゃんはやや顔をしかめて腕を組んで答えてくれました。

「髪？ うーんそれがさ、ありえないくらい髪が青いんだ。校則に染髪の規定はないからいいけど、あんなに派手なのは委員長としてどうかと思つて、頭が痛いわけですよ。名前も青井鬼太郎だよ？ なんだか、出来過ぎだよねー」

青。

教室の窓の外から見える空も、青。

転校生の髪の色も、そして、アオオニさんの髪の色も……。出来過ぎです。

私は、何に感謝すればいいのでしょうか？ 神？ 髪？

「あれつ？ 紅子ちゃん、顔すごく赤くなつてるよ？」

赤。

人間の身体を流れる熱い血潮も、赤。

昨日買つたスカジャンの色も、そして、私の顔の色も……。

深呼吸。

大丈夫。

ツキが回つてるときは、どんどん攻めていくべきだつて漫画にもありました。ギャンブル漫画だった気がしますが、人生にも応用できるはずです。

「唐突ですが、縁ちゃん。やりたいことができました

「へ？ やりたいことって？」

完全な思いつきですが、素敵な思いつきです。

バンドをやりたい。

まったくの素人ですが、なんだかいいじゃですか。流行に乗つてみるのも、たまにはいいのだと思える程度に、私は大人になつたのです。

私と縁ちゃんと、まだ見ぬ青い髪の転校生。

三人でバンドをやる姿を想像して、私はほくそ笑みます。名前からして、随分とカラフルな組み合わせです。必要なら髪を赤く染めるのも悪くないです。縁よりか現実味があるのが救いです。

昨日、母親に言つた嘘を、帳消しにするチャンスです。

新しいことを始めて、自分に挑戦するチャンスです。

私は、きっと、変わります。

エアーギターもどきの動きで縁ちゃんを威嚇します。飛び跳ねます。マイクで歌うフリをします。気分は魅惑の深海パーティーでジヨニー・B・グッドをテケテケと弾くマーティです。

「やりたいことって、もしかして……」

マーティみたいな時間旅行はできないけれど、だからこそ、後悔しないよう今を一所懸命生きていこう。

私の、赤井紅子の青春は、今日から始めましょう。

「そうです。ロックンロールです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9173s/>

---

百の奇人が夜に行く　あるいは現代のオフラインミーティング  
2011年5月2日02時25分発行